主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2013 graph magazine vol.28

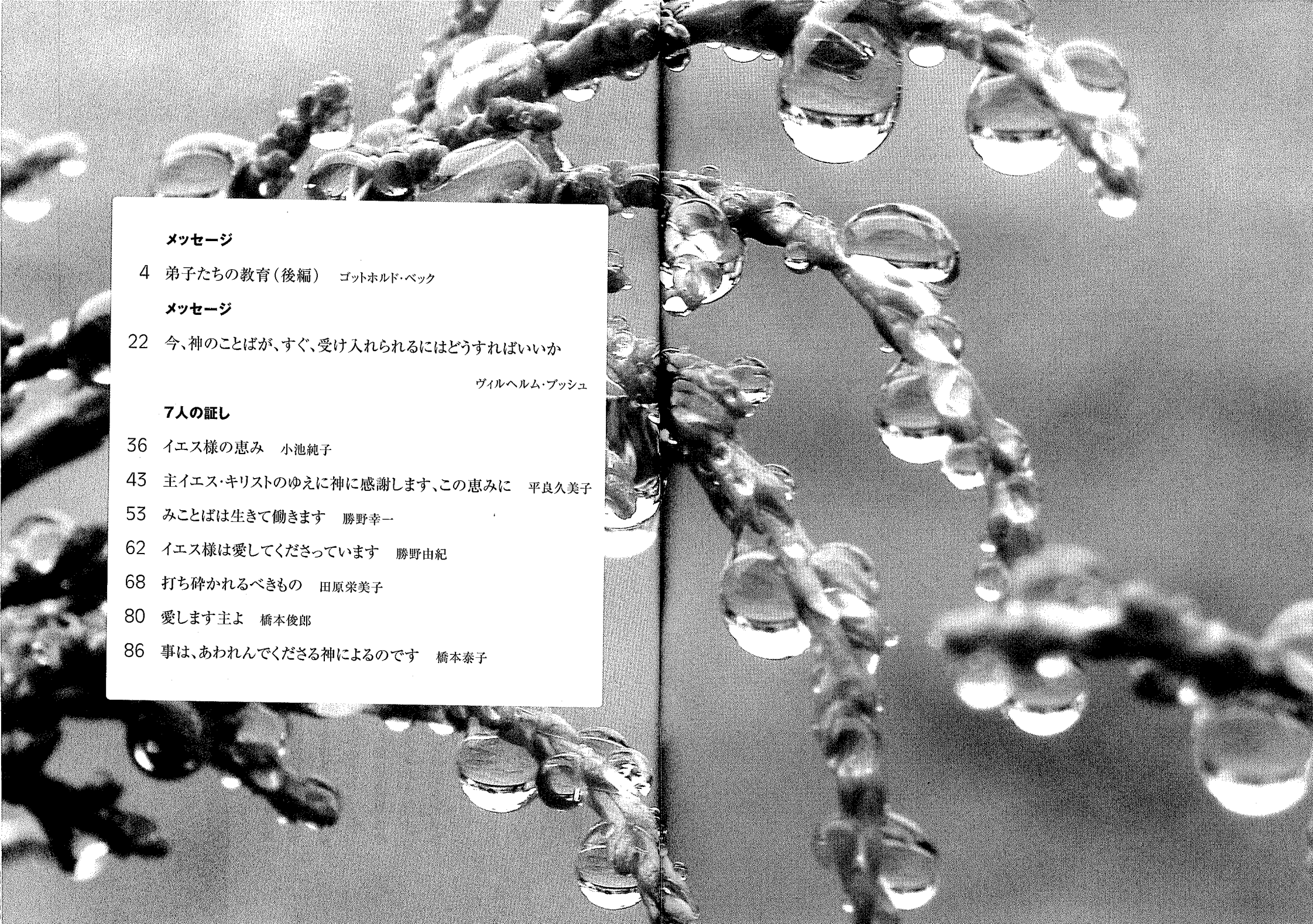
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.28 定価100円（本体95円）



メッセージ

4 弟子たちの教育（後編） ゴットホルド・ベック

メッセージ

22 今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか

ヴィルヘルム・ブッシュ

7人の証し

36 イエス様の恵み 小池純子

43 主イエス・キリストのゆえに神に感謝します、この恵みに 平良久美子

53 みことばは生きて働きます 勝野幸一

62 イエス様は愛してくださっています 勝野由紀

68 打ち砕かれるべきもの 田原栄美子

80 愛します主よ 橋本俊郎

86 事は、あわれんでくださる神によるのです 橋本泰子

弟子たちの教育（後編）

ゴットホルド・ベック

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。（ヘブル　12・2）

前回私たちは、主の教育の目的、手段、結果について学びました。今回も同じテーマについて、聖書の別の個所から考えてみることにしたいと思います。

教育の目的

主が私たちを教育される目的は、第一に「主イエス様のご栄光を明らかにする」ことであり、第二に「私たちが主の似姿に変えられる」ことです。

主がまず私たちに明らかにされるのは、いつも「主イエス様ご自身」です。イエス様はご自身をつねに現したいと思っておられるのです。一方、私たちは自分が本当にとるに足りない者であるということを、よく分かっているでしょうか。自分の失われた状態、あるいは絶対に良くならない自己中心の性質を本当に知っているでしょうか。

(1)主イエス様のご栄光を明らかにすること

主はすべてのことにおいて、ご自身を啓示しようとしておられます。主に出会い、主を体験的に知るときに初めて、私たちの苦しみや悩み、あらゆる問題が解決されます。聖書から、イエス様が嵐の中で弟子たちに現れたときの様子を見てみましょう。

それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ、ご自分は、その間に群衆を解散させておられた。それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。夕方になったころ、舟は湖の真中に出ており、イエスだけが陸地におられた。

イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとのおつもりであった。しかし、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、叫び声をあげた。というのは、みなイエスを見ておびえてしまったからである。

しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。そして舟に乗り込まれると、風がやんだ。彼らの心中の驚きは非常なものであった。というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである。（マルコ　6・45〜52）

ここでイエス様が「舟に乗りこまれると、風がやんだ」とあるのは、弟子たちが直面していたあらゆる問題が解決されたことを意味しています。主はご自身を私たちに、もっと啓示したいと思っておられます。主イエス様は、弟子たちが主の権威をよりよく知り、それを確信し、主イエス様に完全により頼むようになることを願っておられました。彼らが主イエス様を徹頭徹尾、信頼する信仰を持つことこそ、主が求めておられる教育の目的だったのです。この頃の弟子たちはまだそれを悟らず、不信仰の中にありました。

信仰とは何でしょうか。信仰とは、主イエス様に対する絶対的な信頼に他なりません。この信仰がなければ、人は自分のことばかり考えるようになります。もし、あなたが不幸になろうと思うなら、イエス・キリストなど知りたく

ないと思うなら、自分のことばかり考えていればよいでしょう。また、信仰とは、主が全能の方であると確信することです。この確信がなければ、いつも疑惑が起こってきます。疑いの結果は信仰生活の麻痺、あるいは硬直化、そして喜びのない状態です。信仰とは、目に見えないものに目を注ぐことです。これが欠けると、見えるものの世界に対して不安や心配を感じるようになります。

(2)主に似た者に造り変えられること

教育の第二の目的は、私たちが主と結びついて、主ご自身に似た者に造り変えられることにあります。私たちがいつも主イエス様を見上げ、つねに主を体験しているうちに、私たちはおのずから造り変えられていくのです。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。(2コリント　3・18)

主の教育は、人間の努力や試みによってまっとうされるものではありません。ただ主イエス様を見上げて歩むときにのみ、実現されるのです。教育者であるイエス様は決して強制なさる方ではありませんが、ご自身がお手本となっておられますから、私たちが主イエス様に似た者になりたいと思うなら、見えるものに目を奪われることなく、見えないものにこそ目を注がなければなりません。

教育の手段

(1)主イエス様

主が私たちを教育されるときの手段について考えてみましょう。これもまた、まず主イエス様ご自身です。この方は模範的な祈り人であり、自然を従わせる権威を持ったお方であり、そして素晴らしい慰め主です。

・模範的な祈り人

主イエス様はしばしば人々の前から退かれて、ただお一人で山に登って祈られました。

群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。
(マタイ　14・23)

主イエス様でさえも、祈りの生活の必要性を感じておられたのです。私たちよりもはるかに忙しい方であったのに、静かなときをもつため、一人になる時間をつくられました。早朝に、夜に、また真夜中にも、そのための時間をおつくりになられたのです。聖書を見ると、イエス様がどれほど祈る時間を大切にされていたかが分かります。

イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。
(マルコ　1・35)

それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。
(マルコ　6・46〜47)

イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。
(ルカ　5・16)

イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。
(ルカ　6・12)

これらの箇所は、主イエス様の祈りの生活の一部を描き出していますが、私たちもまた主イエス様と同じように、一人で静かに祈り、主との交わりをもたなければなりません。そうでなければ、悪魔の虜(とりこ)になってしまいます。弟子たちにも、主は静かな所に行って祈ることを命じておられます。

そこでイエスは彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所

へ行って、しばらく休みなさい。」と言われた。（マルコ　6・31）

それからイエスは彼らを連れてベツサイダという町へひそかに退かれた。（ルカ　9・10）

「静かなときをもつ」ということは、何もしないということではなく、主を深く思い、主に深く祈りを捧げて交わりを持つことを意味しています。聖書は言っています。

主とその御力を尋ね求めよ。絶えず御顔を慕い求めよ。（1歴代　16・11）

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。（マタイ　7・7）

誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。（マタイ　26・41）

いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。（ルカ　18・1）

あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。（ヨハネ　16・24）

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。（エペソ　6・18）

絶えず祈りなさい。（1テサロニケ　5・17）

あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。（ヤコブ　5・13）

これらのみことばはすべて、私たちが絶えず主に祈り求めるよう命令しています。そして、祈るためには、いくつかの条件があることも忘れてはいけません。

わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。（2歴代　7・14）

もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。（エレミヤ　29・13）

祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。（マルコ　11・24）

ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。（ヤコブ　5・16）

求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。（1ヨハネ　3・22）

祈るための条件とは、心からへりくだり、一心になって主を求め、罪を言い表し、信頼することです。このような祈りに対して、主は必ず答えてくださる、とみことばが教えています。

彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。（詩篇　91・15）

あなたが呼ぶと、主は答え、あなたが叫ぶと、「わたしはここにいる。」と仰せられる。（イザヤ　58・9）

彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。（イザヤ　65・24）

求めなさい。そうすれば与えられます。（ルカ　11・9）

あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。（ヨハネ　15・7）

ここでもう一度先ほどの聖書箇所に戻り、模範的な祈り人としての主イエス様について、さらに学びを進めていくことにしましょう。「それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。夕方になったころ、舟は湖の真中に出ており、イエスだけが陸地におられた。イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれた」とあります。山で祈られていたイエス様は、弟子たちが困っているのをご覧になりました。一般的に言って、主の御前で静かに祈る人は、一つの問題を見る場合にも、高い次元から見ることができ、普通の人よりもはるかに多くのことを見通して、その問題に対する解決への導きを見出すことができます。また主イエス様は、弟子たちの困難をご覧になられたように、いつの時代にも私たちの信仰生活に起こるあらゆる事柄を見ておられます。

ノアの時代に、「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった」（創世記　6・5）のです。主はつねに私たちの考えや思い、また動機などを見ておられます。どんな罪も、主の前に隠すことはできません。私たちの「罪」は「債務」となってしまっています。私たちの生活の中で、この「債務」はどうなっているのでしょうか。すべてを忘れようと虚（むな）しい振る舞いをしているのでしょうか。債務はあくまでも債務であって、支払われない限りはいつまでも残るものです。支払いが済んだ者だけが罪を赦されるのです。そしてそのことを主イエス様が成し遂げてくださいました。主イエス様が十字架でご自分のいのちを尊い代価として、捧げてくださったゆえに、こんにち福音が全世界の人々に提供されているのです。あなたもこの素晴らしい救いを、自分のものにしたいと思いませんか。

モーセの時代にも主は「見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た」（出エジプト　3・9）と語り、エジプトからイスラエルの人々を救い出して完全に解放してくださいました。主イエス・キリストを知らない人はみな、悪魔と罪とこの世の奴隷になっています。本当の解放は、ただ主イエス様によってだけ実現されるのです。自分自身を振り返ったとき、何かが私たちを不自由にし、喜びをなくさせるような事柄に支配されていることがないでしょうか。主イエス様はそのことをご覧になるだけでなく、実際にそれらから私たちを解放してくださいます。

弟子たちの教育

ノアやモーセの時代だけでなく、ダビデの時代にも主はすべてをご覧になっていたことを、ダビデが証ししています。

主の御顔は悪をなす者からそむけられ、彼らの記憶を地から消される。彼らが叫ぶと、主は聞いてくださる。そして、彼らをそのすべての苦しみから救い出される。主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇　34・16～18）

これこそダビデの証しであり、体験でした。あらゆる苦しみや悩みから、主がご自分の民を救い出してくださったのです。信じる者たちにとっては、この主に信頼し、自分の心が主とまったく一つになっているかどうかということが、一番問題です。聖書は「あなたがたは、主を恐れ、忠実に、また全き心をもって、このように行なわなければなりません」（2歴代　19・9）と語っています。

・自然を従わせる権威をもつお方

マルコ6章をはじめとし、聖書には主イエス様が自然をも従わせる権威を持つお方であることが、明白に記されています。ところが、現代ではこの聖書のみことばに疑問符をうち、この事実を認めないばかりか批判する動きさえ強まっています。しかし、主イエス様を本当に体験した人はこの事実を少しも疑わずに、全知全能なる主が自然を支配する力を持っておられることを確信しているのです。旧約聖書においても、来たるべきメサイアの支配と権威はすでに予言されていました。

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。（イザヤ　9・6）

人々は驚いてこう言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」（マタイ　8・27）

主イエス様は「力ある神」と呼ばれているのですから、この方が自然現象をも支配し、荒れ狂う湖をしずめ、その上を歩かれたことは決して不思議なことではありません。いわば当然のことでした。しかし、風や湖をしずめるなどということは、主イエス様にとって大したことではありませんでした。それよりも、はるかに大きなみ業をなされたのです。人間の罪を赦し、ご自分の力でよみがえり、信じる者に永遠のいのちをお与えになったのです。イエス様ご自身が証しておられます。

人々が中風の人を床に寝かせたままで、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。」と言われた。……「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」こう言って、それから中風の人に、「起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい。」と言われた。（マタイ　9・2、6）

だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。（ヨハネ　10・18）

それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。（ヨハネ　17・2）

主イエス様は十字架の死を遂げ、復活したあとで、弟子たちにこう言われました。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」（マタイ　28・18）。そして使徒たちも、主の権威を証しています。

神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。（エペソ　1・22）

キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられます。（1ペテロ　3・22）

主イエス様はすべての力と権威をもっておられます。ところで、私たちにはこの方はどのような存在でしょうか。私たちにとって「見知らぬ人」なのでしょうか。もしそうならば、私たちの前には神なく、望みなく、永遠の滅びに至る道が横たわっているだけです。それとも、主イエスは私たちの「救い主」になっておられるのでしょうか。救い主になっておられるならば、私たちは神との平和を持ち、罪を赦されて永遠のいのちをも持っているのです。

イエス様は私たちの「主」となることを望んでおられます。私たちの生活の中でイエス様が中心になっておられるときにのみ、私たちは主と共に、世界の相続者として遺産を受け継ぐものとなることができ、ことばに言い尽くせぬほどの栄光に与（あずか）ることができるのです。すなわち、主と共に御座に

着くという特権に与ることができるのです。

・素晴らしい慰め主

主が私たちを教育する手段は、慰め主であられる主イエス様ご自身です。

「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。（マルコ　6・50）

このみことばは単なる気休めではなく、みことばの背後には全能なる主が立っておられます。私たちは本当に主により頼んでいるでしょうか。私たちの目に見えるあらゆる恐れ、不安、心配ごとなどから目を転じて、ただ主だけを見上げましょう。私たちは自分自身を見たり、他人を見たり、あるいは自分の感情、考え、意思などを大切にすることなく、みことばを第一にしなければなりません。みことばは言っています。

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。（イザヤ　43・25）

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。（イザヤ　41・10）

あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。（イザヤ　41・13）

主はなぜこのように言われたのでしょうか。信じる者が平安をもつためです。

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。（ヨハネ　16・33）

（2）患難

これまで、教育の第一の手段であるイエス様ご自身について見てきました。教育の第二の手段としては「患難」が私たちに与えられています。しかも、それはつらい苦しみです。先のマルコ6章45節を見ると、主イエス様が弟子たちを強いて舟に乗りこませたことがわかります。つまり、主イエス様に従うときには、必ず患難がやってくるということです。患難を通して、主イエス様は一つの定まった目的を達成しようとしておられるのです。

「教育」というものは、一朝一夕にして完遂できるものではなく、長い時間をかけて少しずつなされていきます。主の弟子たちの場合にも、一度にすべてを学ぶことはできなかったため、何度も訓練が繰り返されました。

マルコ4章35節以下を見ると、以前にも弟子たちが激しい波風を見て慌（あわ）てふためいたこと、その時イエス様が「信仰がないのは、どうしたことです」（マルコ　4・40）とこわがる弟子たちに言われたことが記されています。

マルコ6章の場合にも事情は非常によく似ています。この場合にも風が吹き、波が立っていました。そしてこのときも、弟子たちは不安と恐れで一杯だったのです。しかも前のときと違って、主イエス様が遠く離れたところにおられたため、さらに恐怖が大きかったことでしょう。主イエス様が湖の上を歩いて弟子たちの側にやって来られたのは、すでに明け方の三時ごろだったと記されています。弟子たちは、非常に長い間、恐怖と闘っていたのです。すべての望みが消え果てたときこそ、主が登場なされるときです。そのときは

じめて、主イエス様は私たちに救いの御手を差しのべてくださいます。

ここで簡単に七つの例を見てみましょう。

・長血をわずらっている女

ところで、十二年の間長血をわずらっている女がいた。この女は多くの医者からひどいめに会わされて、自分の持ち物をみな使い果たしてしまったが、何のかいもなく、かえって悪くなる一方であった。（マルコ　5・25〜26）

十二年間も病の虜であった彼女にとっては、もはや何の望みもありませんでした。しかし、まさにこのときこそ、主イエス様が関わりをもってくださるときだったのです。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい」（マルコ　5・34）と主イエス様は優しく話されました。

・汚れた霊につかれた息子

すると群衆のひとりが、イエスに答えて言った。「先生。おしの霊につかれた私の息子を、先生のところに連れてまいりました。その霊が息子に取りつきますと、所かまわず彼を押し倒します。そして彼はあわを吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、霊を追い出してくださるようにお願いしたのですが、お弟子たちにはできませんでした。」（マルコ　9・17〜18）

霊にとりつかれた息子とその父親の状態は、まさに絶望的でした。しかし、このときこそ、主イエス様がご自身を啓示なされるときでした。25〜27節には、「イエスは、・・・汚れた霊をしかって言われた。『おしとつんぼの霊。わたしが、おまえに命じる。この子から出て行きなさい。二度と、はいってはいけない。』するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、出て行った。・・・イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった」と主イエス様のみわざが示されています。

・鎖につながれて監獄にいたペテロ

ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。（使徒　12・6）

このときペテロは二本の鎖につながれており、非常に厳重な警戒態勢がしかれていたので、そこから逃げ出せるなどとは、まったく想像もできない状況でした。しかし、奇跡が起こったのです。7節に「すると突然、主の御使いが現われ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、『急いで立ち上がりなさい。』と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた」とあります。主が御使いを送られ、脱出の道を開いてくださいました。

・難破船上のパウロたち

太陽も星も見えない日が幾日も続き、激しい暴風が吹きまくるので、私たちが助かる最後の望みも今や絶たれようとしていた。（使徒　27・20）

このときはパウロだけでなく二百七十六人がまったく望みのない絶望的状態に置かれていました。その中で、主が救いの御手を差しのべてくださったのです。23〜26節を見ましょう。「私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、こう言いました。『恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。』ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりになると、私は神によって信じています。私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます」。これもまた、人間的にはまったく望みの絶たれた状態の中で、主が救いの御手

を差しのべてくださった例です。

・パロの軍勢に追跡されるイスラエル人

イスラエル人が目を上げて見ると、なんと、エジプト人が彼らのあとに迫っているではないか。イスラエル人は非常に恐れて、主に向かって叫んだ。そしてモーセに言った。「エジプトには墓がないので、あなたは私たちを連れて来て、この荒野で、死なせるのですか。」（出エジプト 14・10〜11）

このときのイスラエル人もまた、まったく望みの持てない状態でした。左右は高い山で囲まれ、前方は海、そして後方からはエジプトの大軍が迫って来るのです。しかし、このような絶望的な状態においても、主は救いと解放の道を開いてくださいました。「朝の見張りのころ、主は火と雲の柱のうちからエジプトの陣営を見おろし、エジプトの陣営をかき乱された」（出エジプト 14・24）のです。目の前の海が左右に分かれて一本の道ができ、その道は乾いていて、前進することが可能となりました。一方、追って来た神の敵はことごとく溺れ死んだのです。

・大軍を前にしたギデオン

そこには、ミデヤン人や、アマレク人や、東の人々がみな、いなごのように大ぜい、谷に伏していた。そのらくだは、海辺の砂のように多くて数えきれなかった。（士師 7・12）

このとき神の敵は、恐るべき勢力となっていました。人間的に見たならば、わずか三百人で敵に立ち向かうギデオンたちに勝利の見込みはまったくありませんでした。しかし、「三百人が角笛を吹き鳴らしている間に、主は、陣営の全面にわたって、同士打ちが起こるようにされた」（士師 7・22）ため、敵は逃げ去ったのです。

・向かい風で前進できない弟子たち

イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとのおつもりであった。（マルコ 6・48）

このとき主イエス様は弟子たちが困っているのをご覧になり、その状態がよく分かっていたにもかかわらず、弟子たちのところにすぐに行こうとはされませんでした。なぜなら、主が登場なさるときは、いつも苦しみや悩みが極まったそのときだからです。そこに主は現れて「舟に乗りこまれると、風がやんだ」（マルコ 6・51）のです。

これら七つの例が示しているように、私たちの苦しみや悩み、また問題がどのようなものであろうとも、いつも主が私たちのことを思っておられ、配慮していてくださるということ、そしてどんなに絶望的な状態であろうとも、主イエス様を信じる人は決して失望に終わることがありません。このことは誰にも否定できない真実です。ですから、聖書はこう語っています。

だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。……こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。（マタイ 6・25、32）

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。（1ペテロ 5・7）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。（ピリピ　4・6）

教育の結果

最後に教育の結果について、少し考えてみましょう。先ほどの聖書箇所の続きを見ると、「彼らの心中の驚きは非常なものであった。というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである」（マルコ　6・51～52）とあります。私たちはこのような弟子たちをどう思うでしょうか。いま聖書を読んでいる私たちは、主イエス様の全知全能と豊かさと同時に、弟子たちの惨めさが分かります。弟子たちは主がどんなに偉大な力を持っておられる方であるかを、そのとき悟るべきでしたができませんでした。

では、私たちはどうでしょうか。本当に弟子たちを批判することができるのでしょうか。私たちも、なんとしばしば、いろいろなことを思い煩い、将来のことを考えて、不安に思ったりすることでしょうか。「主イエス様に徹頭徹尾、完全により頼む」ということは、決してやさしいことではないのです。また、私たちは、しばしば目に見えないものよりも、見えるものに目を向けているのではないでしょうか。信仰とは見えないものにより頼むべきことであって、見えるものには重点をおかないことなのです。

52節に弟子たちの心が堅く閉じていたことが書かれていますが、この弟子たちは、主イエス様のためにすべてのものを捨てた人々でした。にもかかわらず、このとき弟子たちの心は閉じてしまっていたのです。

私たちも、弟子たちと同じように心が堅く閉じてしまう危険性に注意しなければなりません。主が嵐をそのままにしておかれたのは、それを通して、弟子たちが自分たちの本当の心の状態を知るためであり、私たちが多くの苦しみや悩み、あるいは問題に遭遇するのも、私たちの本当の心の状態を見させてくださるためにほかならないのです。

来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。

主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。きょう、もし御声を聞くなら、メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。

あのとき、あなたがたの先祖たちはすでにわたしのわざを見ておりながら、わたしを試み、わたしをためした。わたしは四十年の間、その世代の者たちを忌みきらい、そして言った。「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知ってはいない。」と。（詩篇　95・6～10）

このみことばによると、私たちの心は本当に主を崇（あが）めるか、あるいは堅く閉じてしまうかのいずれかです。

幸いなことよ。いつも主を恐れている人は。しかし心をかたくなにする人はわざわいに陥る。（箴言　28・14）

このみことばも、私たちが心から主を恐れるか、あるいは、心をかたくなにしてしまうかのいずれかであると言っています。

「きょう。」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。（ヘブル　3・13）

私たちは、毎日、主の御前に心を静めて御声に聞き従うか、あるいは徐々に心がかたくなになっていくかのいずれかです。

今、神のことばが、すぐ、受け入れられるには どうすればいいか

ヴィルヘルム・ブッシュ

クリスチャンなら、買い物客で雑踏する繁華街を歩いていて、この人々に福音を今すぐ伝えるにはどうすればいいか、と考えたことがあるでしょう。たしかにこれはむずかしい問題のように思われます。

街を行く人々は、目先の用事や楽しみ、悩みごと、もめごとなどで頭がいっぱいで、永遠についての神のことばを聞いてくれそうに思えません。私たちが熱心に福音を伝えようとしても、実際にできることは、ほんのひと声かふた声、人々に声をかけることがせいぜいでしょう。つまり、街をゆく人々に福音を伝えるチャンスは、私たちにはほとんど無いのです。

そんな中で、ある人が福音に耳を傾け、主イエス様を信じるようになったとすれば、それはまさに神のなさる奇蹟であり、主ご自身が聖霊を通して働かれた結果です。福音を伝え、また証しをするためには、どうしても主ご自身による聖霊のお働きが必要です。祈れ、そうすれば主が聖霊を通して働かれる、という言葉のとおりです。現実はどうでしょうか。一つのたとえ話をしましょう。信仰を持つ主婦は誰でも、天の父は私たちを必ず養ってくださると信じています。でも、だからと言って彼女は、主が私たちを養ってくださるのだから、今日の夕食も主が用意してくださる。私たちは楽しみに待っていればよい、と言って何もしないでしょうか。そのようなことはありません。彼女は自分で献立を考えて買い物に行き、心をこめて夕食の準備をします。家族においしいものを食べさせるのは自分の責任だと思っているからです。私たちが神のことばを人々に伝え、証しする場合もこれと同じではないでしょうか。

確かに、今まで神に無関心だった人が神の語りかけに耳を傾け、心を開いて主を信じるに至るのは、ひとえに神のみわざです。でも、もしあなたが神のことばをその人に取り次がなかったら、どうして福音が伝わるでしょうか。どうして神の愛が伝わるでしょうか。語ることは大切です。

でも、いざ語ろうとする時、人はどのように語ればいいかと迷うのではないでしょうか。多くの人は、自分はその役目を果たせるのだろうか、自分の語り方は正しいのかと自信をなくしてしまいます。しかし、それはすべてが自分一人の責任であるかのように思いこんでいるからなのです。

福音を伝えるためにはどうすればいいのか、という疑問に答えるために、私の体験をお話します。私は多くの街で福音を説き、人々が神のことばに耳を傾け、それを信じるという体験をしました。こんな風に言うと、まるで私が成功ばかりしていたように聞こえますが、実際は数限りない失敗の連続でした。失敗した時は絶望のあまり気力も萎(しおれ)てしまいます。しかしその失敗を通して、神は私に主の御国の伝道の奥義を教えてくださいました。それは次のことです。

今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか

「私たちのキリスト・イエスは、人間に見放されて十字架上で死んでくださいました。これ以上の大きな敗北はなかったかに見えます。しかし、まさにこの敗北こそが最大の勝利だったのです。今日、イエス様をほめたたえる者は、主が十字架の上で私たちを救い出すために死んでくださったという、その事実をほめたたえるのです。イエス様は一粒の麦となって地に落ちて死なれ、すばらしい実を結んでくださったのです」

私の伝道の限りない失敗の中で、思いもよらず実を結んだ一つの実例をお伝えしましょう。私はある小さな町で学生の集いを開いていました。でも、もっと対象を広げ、一般の方々も集える集会をやるべきではないかと思い、地元の牧師に相談しました。彼は、誰も来ませんよ、と気の毒そうに言いました。しかし、私と学生たちはやってみることにしました。皆で聖歌を歌いながら歩き、多くの家々に招待状を投げ込み、街をゆく人々を誘い、考えられるあらゆる方法を試したのです。その結果、集会に来てくれたのは女性三人、年老いた男性一人でした。会場はがらがらでした。こんなに少人数なら、教会でなくて小さな部屋

でもよかったな、と思いました。私はこの方法は失敗だと思いましたが、たった四人でも新しい方が来てくださったことは素晴らしいことでした。

次の集会に向かって、私と学生たちは新しい方法を考え出しました。まず、街のスポーツクラブの「レクリエーションの集い」に出かけて行って、伝道集会への招待状を配り、参加を呼びかけました。しかしすぐに警備員の目にとまって外に放り出されました。その次に考えたのは、スポーツクラブ所属のサッカー・チームに試合を申し込む、という手でした。さいわいその試合に勝つことができたので、私たちは勝った、だから今度は、あなた方が私たちの伝道集会に来てくれるべきだ、と言って集会に招きました。これはほんの一例ですが、私たちは当時、人々を伝道集会へ招くために効果がありそうなことなら何でもやってみました。しかしその結果は、残念ながらみじめな失敗の連続でした。毎回、私たちは打ちひしがれて家路に着きました。

しかし、その試みは思いもしない形で報われることになりました。多くの試みを通して一人の卒業間近の高校生が興味を示し、福音を聞いて信仰へと導かれたのです。さらに彼は卒業後優秀な化学者になり、近くの町に住み、そこで熱心に伝道して多くの人々を神のもとに導いたのです。これが、私たちの多くの試みの果てに神がくださった貴重な実だったのです。

さて、今回のテーマ「今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか」に戻りましょう。人が福音を聞き、受け入れ、救われるのは、たしかに神が聖霊を通して働かれる結果です。しかし、ここで問いたいのは、では私たちには何ができるのかということです。そのために、「今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか」という題名から、その中に含まれる一つひとつの単語を取り上げて、ごいっしょに考えて見ましょう。

「今」――現代は福音が伝わりにくい時代なのか

最初に取り上げるのは「今」です。確かに見方によっては、現代は数百年前とは全く違った時代になっています。高度情報化社会であり、多元的価値観の社会であり、エネルギーと環境問題の社会であることは、いまさら言うまでもないことです。しかし、長期的な歴史観を持っている人々は、そういった時代の奥に流れる原則として、人間は基本的にはいつも同じであり続ける、ということに気づいています。ゲーテは、人間は長い時代を通して本質的には何も変わっていないと言いました。聖書が描いているように、人間は今も昔も、自己中心的で、自分は不幸せだと思い、嘘つきで、つねに神から逃げようとするまことにやっかいな者であり、孤独で、慎みも愛も持たない存在なのです。

二千年前に、そんな人間のすべての罪を贖うため、主イエス様が十字架上で死んでくださいました。生まれながらの人はみな、神の目から見て失われた存在、罪人です。しかし神は、そんな罪人の私たちを滅びから救い出そうと、心の戸をたたき、語りかけようとしておられます。私たちは主から見れば愛されている罪人なのです。人類は進歩し、神を必要としなくなり、福音を伝えるのは困難だと言う人がいますが、神が私たちに注がれる愛を考えれば、そんなことは的外れです。また、現代の社会は高度に複雑になったから、伝道のためには情報科学や心理学、社会学などの深い知識が必要だという意見もよく聞きますが、これも見当はずれです。神はご自身、全能の力をもって私たちに働きかけておられるのです。

「神のことば」――「自分の言いたいこと」を伝えてしまう誤り

人々が神のことばを受け入れようとしないのは、私たちが混り気のない神のことばそのものを伝えるのではなく、神について考えたこと、自分が持つ信仰のこと、集っている教会のことを語るからではないでしょうか。神はそのようなことを語れとは言われません。私たちは神ご自身のみことばを伝えなければならないのです。パウロはテサロニケの人々に次のように書きました。

こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか

とばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。
（1テサロニケ　2・13）

聖書の内容を切り取って、その中からいくらかの真実らしいものを絞り出し、それが神からのメッセージ（神の語られることば、伝言、啓示）であるかのように、大胆に主張する傾向が私たちにあるのではないでしょうか。しかし、まさしくそこに大きな弊害があります。聖書にさまざまな人為的操作を加えることによって、知らない間に「神のメッセージ」から「人のメッセージ」にすり替わってしまうのです。

私たちは、神のことばをまっすぐに伝える代わりに、自分の信仰や聖書の用語解説などを語りがちです。どうすれば主イエス様のみもとに導けるかでなく、人を説得する方法に思いをめぐらしがちです。極端な場合には自分の知識を誇示します。イエス様の十字架を中心に、罪、悔い改め、回心、罪の赦しについて話す代わりに、生活の助言をしてしまいがちです。聖霊による聖めを伝える代わりに、人生をうまく乗り切る方法を語りがちです。ああ、このような私たちを主が憐れんでくださいますように。今、世の中の人々にとっては「人のメッセージ」などまったく興味を引かず、何の役にも立ちません。人々は、まさに「神のメッセージ」を必要としています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

私が聞きたかったのはまさにこのことだ、と世界中の人々が渇望している神のことばこそが語られるべきです。それなのに、神のことばを誰一人伝えない、ということこそが最大の問題です。

人々が神によって救われ、罪から解放されるには、神のことばそのものが必要だと聖書が説いていることを、私たちはそのまま受け入れるべきです。私たちは、神のことばという最も大切なものをそのまま提供すべきであり、そうしてこそ福音が救いに至る道として人々に受け入れられるのです。なぜなら主ご自身がみことばを約束し保証されるからです。

私の個人的な体験を一つ話します。一九六二年の夏、私はエッセンのグルーガ会館で開催された「ドイツ歌のフェスティバル」で礼拝を担当するように頼まれました。そこに集まる人々はあまり教会に行かない人々だと聞いて、私は、これはよく考えなければいけないと思いました。フェスティバルに参加する人々は熱心な信者ではないにしても、きっと自分たちの歌が神によって祝福され、高められることを望んでいるに違いない。だから歌があるところには心の安らぎがあるというテーマで話をしようと思いつきました。さらにその中に、ルターが音楽の大好きな女性を賞賛した、という逸話を入れようと準備しました。

しかしその時、主は、どうすれば神に祝福され、神の子どもとされるかを宣べ伝えよ。十字架上で死に、よみがえった救い主を証しせよ、と明確に示してくださいました。

しかしそれにもかかわらず私は主に向かって「主よ、彼らは、そういった話を聞く心構えなど全く持ち合わせていないのです。今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか舞台には自由主義者、無神論者、外国人など雑多な人々が集まった合唱団やオーケストラが並んでいます。イエス様の話を始めるなら、彼らはいったいどんな態度に出るでしょうか。彼らは音楽について、あるいは神がいかに彼らの歌を愛しておられるか、などということを聞きたがっているに違いないのです」とぶつぶつと文句を言い続けました。しかし主は、私に何の憐れみもかけてはくださいませんでした。私は、私の考えた話をすることにこだわっていたのですが、主はご自身のメッセージをそのまま伝えることを望んでおられました。最終的に私は諦め、私たちが神の子どもとされる唯一の道は、ただイエス様を通してだけなのだというメッセージを用意し、舞台で話しました。私の周囲の合唱団もオーケストラも、観客も、息詰まるような緊張感をもって耳を傾けていました。会場には、主の聖さが満ち、主はこの機会を十二分にお用いになったのです。

時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。
（2テモテ　4・2）

私たちは、神について、福音について語ろうとすると、今は時が悪いと感じてしまうのではないでしょうか。しかし、私たちが聖書の真理を、信仰に立って語り始めるその時は、まさしく神ご自身の時なのです。

神のメッセージは、語る自分がそれを心から信じている時にだけ、人々に受け入れられます。現代の人々は、単なる長話と神のメッセージとの違いを聞き分ける耳を持っています。

ある福音伝道会の後で記者会見がありました。その時、私は、記者に向かって次のように言いました。「あなた方は私にいろいろと質問しました。今度は私から皆さんに質問させてください。あなた方は、取材で得られた情報を、深く真剣に受け止めておられますか。あなた方は私の話をまとめて福音伝道の記事を書かれますね。でもそれが終わると次はカーニバルの取材、畜産組合の取材、選挙の取材と、次から次に記事を書くのでしょう。そこで質問しますが、取材によって得たものの何を、あなたがたは真剣に受け止めることができるのですか」。すると一人の記者がまじめな顔で「たった今、私たちは単なる長話と真剣に受け止めるべき真理のことばの違いを知ったところです」と答えました。そして彼は、「私たちの前に座って語っている人自身が、今、自分の伝えていることを心の底から信じているかどうか、私たちにはすぐにわかるのです」と付け加えました。この記者が言ったことは、現代の人々の誰にでも当てはまります。

福音を伝える私たちはつねに、「あなた自身は、聖書の言葉を本当に信じているのですか。もしそうならあなたの言うことを聞きたい。でも、そうでなければ聞く意味はない」と真剣に問いかけられています。

「すぐ」――直ちに神のことばを伝える

「すぐ」について考えてみましょう。そのためには、反対の言葉である「まだ」について考えてみるといいと思います。「まだ」は否定的な意味で使われます。実は私は「まだ」という言葉を、私の辞書から消し去りたいと心から願っています。

「まだ」は逡巡（しゅんじゅん）と撤退を秘めた言葉です。最近、新聞に、わが国のキリスト教徒のうち百人中四人しか実際には教会に行っていないという記事がありました。これを書いた人はきっとこう言いたいのです。四パーセントの人々がまだ残っているが、遠からず三パーセント、二パーセントになると。これは悲観的で後ろ向きの論調です。「まだ」を使った後ろ向きの記事は、戦争中の新聞によく見たものです。たとえば、わが軍はまだこの陣地を守っている（明日はどうなるかわからない）、わが国は領土の半分をまだ保有している（近くもっと減るだろう）などといったものです。つまり目下のところ守っているが希望は持てない、という悲観的な言葉なのです。

神に対する時には、まだという言葉は不信仰、みことばへの逡巡を意味します。主なる神は、天においても地においてもすべての権威を持ち、すべての力を働かせ、時空を超越して勝利に向かって戦い、攻めておられます。このような万軍の主が、主を信じる者の口から、「まだ」という逡巡の言葉を聞きたいと思っておられるでしょうか。

しかしこれについては、ここ二百年の間に人間が急速に堕落、俗化してしまったではないか、昔は聖日には誰もが教会に必ず来ていたが、今は違う、といった反論がでることも承知しています。確かに私もキリスト教社会の良い習慣が失われ、教会自体が街から消え去った例も知っています。だからこそ、教会の責任者や信者は、私はまだ守っている、まだがんばっているという意識を持ち、まだという言葉をたびたび口にしたがるのです。信仰を守る、礼拝を守る、というのも同じではないでしょうか。信仰は守っていればいいものでしょうか。

福音、神のことばは、勝利の上に勝利を重ねるお方、主イエス様についての神のメッセージです。ヨハネの黙示録にはこうあります。

> 彼（主イエス）は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行った。（黙示録　6・2）

かつて東ドイツを訪れた時、教会の関係者が洗礼を受ける人や、聖書の授業を受ける子供が激減している、と心配しているのを何度も耳にしました。そこにあるのは、教会の活動は“ま

今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか

だ〟続けられてはいるが、明らかに衰弱し、かつての良い習慣を一つずつ失っているという受身な考え、消極的な見方でした。私は悲しくなりました。

主イエス様に従う者は、常に積極的な姿勢を取らなければなりません。私たちは、自分の辞書から、まだ、という言葉を消し去る必要があるのです。私たちは、まだ的思考に陥ってはなりません。「まだ」でなく「すぐ」はどんな時代にも必要です。

まだ、にはまた、問題に向かっていこうとしない消極的、放任的な姿勢があります。それは、今すぐ、と要求される主のご命令を先送りし放置するという態度です。主がお喜びにならないのは当然です。このように見てくると、すぐ、という主のご要求が、私たちにとっていかに大事であるかが自から明らかです。

黙示録11章3節から12節に述べられているふたりの証人も、殉教の死に至るまでイエス・キリストの旗を掲げ、逡巡せず積極果敢に行動しています。私たちもまた、主なる神の福音を伝えるためには、躊躇(ちゅうちょ)、撤退、つまりまだ、などと言っている暇はないのです。現代に生きている人々を見てください。生きる意味を失い、内面的に燃え尽きている人々の何と多いことでしょう。このような状況の中にあって、私たちが拠(よ)って立つべきものは神のことば以外にはありません。私たちにはこのすばらしい神のことば、福音が与えられています。恵みの時は限られています。ですから私たちは、今すぐに神のことばを人々に伝えなければなりません。かつて、ある教会の指導者は、今もなお、人々に信じるに足るものを提供できるのは、私たちキリスト者だけですと言いました。人類の歴史始まって以来、今日ほど神のことば、福音が必要とされている時代はありません。私たちは今すぐ神のことばを語らなければなりません。まだという言い訳に終止符を打たなければなりません。

「受け入れられる」――議論に拠らず、良心に語りかけることによって

次に「受け入れられる」という言葉を見てみましょう。どのようにすればみことば、神のメッセージが受け入れられるでしょうか。知性によってでしょうか。理性によってでしょうか。多くの人々は、知性や理性によって神からのメッセージを受け入れるのだと考えています。だから知性や理性に根ざした、神についての質問をよく受けます。でも知性や理性によっては、いくら議論したところで結論を得ることはできません。

ある時私は、聡明で教養ある人と神について議論をしたことがあります。彼は私の質問に辛抱強く答えてくれました。彼は、三位一体やイエス・キリストの処女降誕から始まって現在の教会のあり方まで、聖書に書いてあることに共感できず、いらだたしい思いをしていると言いました。話が終わった後で、私は彼が離婚した直後であることを知りました。これは私にとって大きなショックでした。なぜなら私はこの人と長時間話したにもかかわらず、彼が真に何を求めているのかを察知できなかったからです。彼は別れた奥さんとの関係をどうすることもできませんでした。彼は自分の奥さんへの負い目に触れられたくなかったのです。

この男性は、しばらくしてもう一度会いたいと言ってきました。そこで私は彼のところに行って次のように話しかけました。

「今のままの生活を続ければ、あなたは地獄に直行することをご存じですか」。こんなことを言えば、彼が怒って私を家から放り出すかも知れないな、と一瞬思いました。でもこれを語ることはどうしても必要だったのです。彼は、私にはそれが分かっていました。だから今日、ぜひあなたとお話ししたいと思ったのですと言ったのです。これでお分かりかと思いますが、このように神様のメッセージが受け入れられるのは、理性によるのではなく良心によるのです。

パウロは、すべての人々のうちに良心を見出すことができると言いました。また、神の裁きについても明快に述べています。異邦人の中には、このようなパウロの説教に反発し、理論的、知的でないとあざ笑う者もいました。しかし、その反発とあざ笑いが、実は彼らの内にある良心の呵責を表していたのです。神のことば、神のメッセージは、私たちが間違った伝え方をするなら受け入れられません。私たちが福音を伝える場合、人々の良心にではなく理性に訴えようとするなら、それは際限のない時間の浪費となります。神のメッセージは人々の良心に向けられて今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか

いますから、神のメッセージが人々に受け入れられるのは、彼らの良心に語りかけられている時だけなのです。多くの人々は良心に触れられると、心は落ち着きを失い、時には敵意まで表します。でも、その時、無意味な空論は消え去っているのです。

ある集会で私が大勢の学生に向かって話している最中、議論をしてもいいですか、という声がかかりました。私は「君たちに私はいのちと死について十分に話した。この問題については君たちには二者択一の道しかないのだ。いのちに至るか、永遠の滅びに至るかだ。君たちはそのどちらかを選ばなければならない。議論などしている暇はないんだ」と答えました。

「どうすれば」―― ただ、まっすぐ、神の言葉を、主の権威によって伝える

「今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか」。この題名の中で最後に残った言葉は「どうすれば」です。

最近、働く若い人が集まると、新しい言葉が必要だという主張をよく口にします。彼らはいつも何か目新しい先進的なスローガンを欲しがり、新しい言葉を捜しています。でも、新しい言葉は別の福音を意味することにもなりかねません。今、私たちが必要としているのは、新しい言葉ではなく、まっすぐな言葉ではないでしょうか。

聖書の福音を語る人々の中には、決まりきった言い回しばかりする人々が大勢います。牧師や神学者たちでさえそうです。目を閉じて彼らの話を聞いていると、まるで録音を繰り返し再生しているかのように思えたりもします。しかし、神のメッセージを伝える時は、イエス様が話されたように日常で使われる言葉で、率直に語るべきです。また、どんな言葉や言い回しをするかということよりも、はるかに重要な点があります。それは、福音そのものがまっすぐに語られているかどうか、ということです。福音が明快に語られていなければ、たとえどんなに新しい言葉や言い回しが使われたとしても、全く意味がありません。

福音を宣べ伝える時に余計な回り道は必要ありません。ある伝道者は、人々に神のメッセージを受け入れてもらうために、少し回り道をすることが必要だと言います。しかし、あれこれ

話をした挙句に、いきなり頭をひっぱたくように福音を語るのでは現代人には受け入れられません。そのようなことでは、聞いている人は、あなたは一体何をしたいのか、神のことを話したいのか、それともただ議論をしていたいのか、あるいは無理やり「うん」と言わせたいのか、などと言うに違いありません。私たちの使命は福音を伝えることであり、そのためには余計な回り道はいっさい必要ないということです。

戦時中、私が若くて未信者の将校だった頃、負傷して南ドイツのある町の野戦病院に入れられたことがありました。同じ部屋には、神様から遠く離れた幾人かの将校たちも入院していました。彼らの心は戦いに傷つき疲れており、空虚で不幸そのものでした。そんな時、一人の牧師が病院を訪ねて来ました。牧師は天気や戦争や私たちの怪我を話題にしながら、少しずつ福音の話に誘い込んでいこうとしていました。

当時、若くて生意気だった私たちは、牧師が霊的な話を持ち出そうとするたびに面白半分に茶化しました。そして彼の家族のことや、彼が兵隊に行かなかった理由などを次々に質問し

今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか

たので、牧師は話したいことを一切口にすることができず、そのまま引きさがってしまいました。この不愉快な思い出は、後に私が信仰を持ち、私自身が牧師として病院を訪問するたびに苦々しく思い出されました。

後になって私が牧師として病院を訪問する立場になった時、挨拶がすむとすぐ彼らの関心事について短く会話した後、次のように切り出すことにしました。「読みかけの新聞を片づけてくれませんか。トランプも片づけてくれませんか」。病院でなく、個人のお宅に集まった主婦が相手の場合には、ほんの少し家事の手を休めてここに座ってくださいとお願いし、それからこう切り出しました。「実はあなたがたのために、とっても大事なことをお伝えするためにやってきたのです」。そしてイエス様について、神との平和について話しました。そうすると、集まった人たちは熱心に聞き出したのです。人々は心の底では神様に対して飢え渇いているのです。

今は故人となられたローレンツェン牧師とかつての軍港の町キールに行ったことがあります。第二次世界大戦直後のことで

した。市街のあちこちに爆撃で破壊された家屋の残骸が残っていました。その一つの高くて危険な壁の上に一人の若者が立って、誇らしげに何かを叫んでいるのが見えました。それを見てローレンツェン牧師は、「困りましたね。一体誰がああいった若者にイエス様の福音を伝えることができますか」と言いました。私は、「彼はあなたの言うことも私が言うことも聞かないでしょう。でも、もし若い自動車修理工があの壁に登っていって彼の横に座り、『よくこんな高い所に登ってきたな。偉いぞ。でも、これが最高じゃないかもしれない。君には最も大切なものがまだ欠けているよ』と言えばどうでしょうか」と答えました。今、神のことばが、すぐ、受け入れられるためには、語るにふさわしい人が、ふさわしい場所で、ただ、神のことば、福音メッセージをお伝えすればよいということです。

福音メッセージを語るにあたってもっとも大切なのは権威ではないでしょうか。最近、ある教会の新聞で次のような記事を読みました。

「ある小さな町に二人の医者がいた。一人は人気者で、患者たちと温かく接し、いつも気軽に冗談を言い合うような医者だった。しかし残念ながら彼は最新の医学知識と最先端の医学技術に欠けていた。大勢の患者がこの医者の所に喜んで通っていたが、病状が深刻になると、彼らはもう一人の医者のほうに行ってしまった。このもう一人の医者は、患者の取り扱いが事務的で冷淡だった。しかし彼は、医学的な深い知識を持ち、適切な最先端の治療法を知っている医者だった。福音を伝える伝道者の場合も、同じことが言えるのではないだろうか。気軽に親しげに話してくれる伝道者は人々の人気を勝ち取ることができるかもしれないが、多くの場合、彼らの神学的知識は非常に乏しい。彼は最新の神学書を読んでおらず、新しい研究には全く通じていないことが多い。だから深刻な問題を抱えた人々は、神学的基盤がしっかりした伝道者の所に行くのだ」

教会の新聞の内容はざっと以上のようなものでした。不思議なことにこの教会の新聞には、心を込めて人々と親しく話し、なおかつ神学的素養についても十分に身に着けた伝道者が存在する、という視点が落ちていました。どう見ても偏った二者択一の

空論でした。

この新聞記事を読んで私が抱いた不満は、霊的な権威に関して何の問題提起もされていないことでした。伝道に最も必要なのは、主が与えられている霊的な権威です。いくら人当たりがよく、おしゃべりでも、神から与えられる権威が備わっていなければ、ただのおしゃべりに過ぎません。また、神学に通暁した冷淡な神学者は、神からの権威が与えられていなければ、愛のない教師に過ぎません。

神のことば、神のメッセージが人々に受け入れられるのは、真理を語る人が神からの使命と権威を与えられている時だけなのです。たくさんの人々が神について語ります。しかし、彼らは神からの権威を持たず、神からの使命を受けていない場合が多いのです。

もう一度先ほどの教会新聞の記事に戻りましょう。神学的知識は乏しくとも人々に語りかける親しげで温かい語り口も、神学理論的に高度であっても冷たい語り口も、そのどちらも、聞いている人々の心に触れることはできません。問題は人間的なものではありません。主イエス様は言われました。

わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。（ヨハネ　15・5）

神のことばを取り次ぐ時、最も重要なことは、いかに語るべきかではなく、主イエス様ご自身が語る人に資格と能力を与えてくださっていることです。ですから、みことばを語る権威は、語る人が神さまとどのような関係を持っているか、にかかっています。

「今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればよいか」について考えてきました。最も大切なことは、語る人が、密室の祈りによって神との絶えざる交わりのうちにいることです。たとえ人間的には能力や資質に問題があると思われる人であっても、主が使命と資格をお与えになるなら、その人が語るメッセージは人々に受け入れられるのです。主なる神は私たちに人間的な知恵を求めておられるのではなく、私たちの忠実さを求めておられるのです。

今、神のことばが、すぐ、受け入れられるにはどうすればいいか

イエス様の恵み

小池　純子



後列左から夫の克明さんと純子さん。ご家族とごいっしょに

一昨年の冬のことです。外に出ると雪が降っていて、道路に、木々に、車に、降り積もっていました。その雪を見ているうちに、目頭が熱くなるのを覚えました。二つの聖書の言葉が頭に浮かんだからです。

たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。（イザヤ　1・18）

イエス様は、このような私をも愛してくださり、そのままでよい、不完全でいい、真っ黒でもよいと言ってくださり、私の上に雪をたくさん降らせて真っ白にしてくださるのです。その雪とは、イエス様が十字架の上で流してくださった血潮です。イエス様に心から感謝致します。

イエス様に初めて出会い、信じたのは、遠い異国の地インドネシアでのことでした。父の転勤で、小学校六年生から中学校三年生までの四年間、家族と共に移り住みました。ジャカルタ日本人教会に通っていた同級生に誘われて日曜学校に行くようになりました。中学校二年生の時に参加したバイブルキャンプで、日本から来てくださった牧師さんからイエス様のお話を聞きました。イエス様は二千年ほど前に十字架の上で血を流して死なれたこと、いっさいの憎しみ、ののしり、痛み、孤独、絶望を負って死んでくださったこと、私のわがままや罪を赦すための身代わりとして罰せられたこと、三日目によみがえって私たちに永遠のいのちを与えてくださったこと、天国でずっと一緒にいてくださること、永遠の滅びから救ってくださったことを知りました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。（ヨハネ　3・16〜18）

友人と共に涙ながらにイエス様を信じ、受け入れました。しばらくは大変喜んでおりましたが、父の赴任の任期が終わり、高校受験を控えて日本に帰国した後は行きたい教会には出会えませんでした。しだいにイエス様から離れ、自分勝手に生活をするようになりましたが、大学生活を送っていたある日、ジャカルタ日本人学校の同窓生である棚村秀樹さんから連絡がありました。棚村さんがイエス様をどのようにして信じるようになったかという証しを聞きに来て欲しいというお誘いでした。何人かの同級生と一緒に家庭集会に行きました。それがキリスト集会と出会った時です。その後、御代田福音センターで行われた夏の喜びの集いや家庭集会、吉祥寺キリスト集会の礼拝にも誘っていただき、すっかり忘れていたイエス様のこと、聖書のこと、イエス様の十字架のことを少しずつ思い出し、しばらくの後ようやく、すべてを思い出したのです。私を愛してくださり、いのちと引き換えにまでして滅びの穴から救い出してくださったイエス様を忘れて自分勝手に生活していた私を見捨てることなく、あきらめることなく呼び求め続けてくださり、そして再び

みもとに引き寄せてくださったのです。

あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。

（ルカ　15・4）

イエス様ごめんなさい、そして本当にありがとうございます、としか言えませんでした。それから約二十年近くの歳月が流れました。様々なことがありましたが、イエス様はいつも私の側にいて、私を恵みで満たしてくださいます。イエス様が与えてくださった恵みについてお話しします。

イエス様を信じてから、私は一人ぼっちではなくなりました。イエス様は目には見えませんが、どんな時にも側にいてくださり、私を守り、小さなお祈りにも耳を傾け、応えてくださるのです。いつでもどこでもイエス様と一緒です。いつも心があたたかく、深い水の底のように静かな平安が心を覆っています。時にはイエス様が見えなくなって、イエス様がおられる上を見ようと必死でがんばっても顔を上げられないほど辛い時、苦しい時、疲れ果ててしまった時もありました。ふと気がつくと、イエス様は私の足元にしゃがみこんで私の顔を下からのぞき込んでくださっているではありませんか。「がんばらなくてよい。わたしはここにいる」と。イエス様はこんな私をも友と呼んでくださいます。

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。・・・わたしの目には、あなた高価で尊い。わたしはあなたを愛している。・・・恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。

（イザヤ　43・1～5）

イエス様は私をイエス様の大きな家族に加えてくださいました。いつでも共に祈り、支えあい、共に喜び、共に悲しんでくれる家族です。イエス様も「共に苦しもう」と言ってくださり、共に泣いてくださいます。心開いて語り合い、悩みを一緒に祈ってくださる、愛する兄弟姉妹は私のかけがえのない宝となりました。

それから、イエスは手を弟子たちのほうに差し伸べて言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」

（マタイ　12・49～50）

友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。

（箴言　17・17）

結婚という大きなプレゼントもくださいました。結婚するなら一緒に祈るために結婚したいと思っていましたが、イエス様はこの願いもかなえてくださいました。

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

（マタイ　18・19～20）

克明さんは「祈ろう」と言ってくれる夫、「祈ったの？」と尋ねてくれる頼もしい夫です。朝に夕に共に祈る相棒です。子育ての悩み、人間関係の悩み、家族や仕事のこと、小さなことから大きなことまで祈ります。家族、親族や友人知人がイエス様に出会い、信じることができるように、また、神様の兄弟姉妹の歩みの祝福、守りを一緒に祈ります。そして、神様の素晴らしさを

共に味わう幸せが与えられています。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといううしあわせ、なんという楽しさであろう。…主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

（詩篇　133・1、3）

ところが、先日はささいなことがきっかけで、ふだんは滅多に怒らない物静かな主人を憤らせてしまいました。聖書にはこう書いてあります。

妻たちよ、主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。

（コロサイ　3・18）

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。（エペソ　5・22〜24）

妻もまた自分の夫を敬いなさい。

（エペソ　5・33）

怒らせてしまった原因は、主人を主人として敬っていない、重んじていない心、主人に従えない、私の心の奥底に潜む罪でした。私はしばしばとても正しいのです。そしてその私の正しさを通そうとすることをイエス様はよしとはなさいません。

あなたは正しすぎてはならない。知恵がありすぎてはならない。なぜあなたは自分を滅ぼそうとするのか。

（伝道者　7・16）

イエス様はその自分の正しさを捨てて、主人に従うことをよしとされます。聖書にある神様の定められた秩序とは、妻は夫に従い、子どもは親に従うというものです。それを犯すことは神様の権威を犯すことであり、神様を悲しませ、神様に対し反逆することであるということは何度となく聞いて、頭では分かっていたつもりでした。しかし、実践の場である家庭生活を通して、私はまったく駄目、私にはできないと分かったのです。救われた後も、私は罪赦された罪人に過ぎないのです。イエス様が十字架上で私たちのために流してくださった血潮に心から感謝します。救われた後の歩みにおいてもイエス様の十字架の血潮が私には必要です。真っ黒な罪が私の内に生まれてくる時、それを示される時に、イエス様の真っ白な雪のようなその憐れみ、イエス様の十字架の血潮が私には必要なのです。そしてイエス様は「がんばらなくてよい。そのままで来なさい」と、仰ってくださいます。「あなたができなくても、わたしがやる」と。ですから、本当に感謝です。

イエス様の恵みとして三人の子どもも与えられました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

主人の父、私の両親、妹、祖母、たくさんの親戚はまだイエス様を信じてはいませんが、この聖書のお約束がありますので、必ずイエス様が成してくださると信じて、感謝しています。同様に私たちに託された三人の子供たちについても、必ずイエス様を信じ救われることをこの聖書のみことばの約束に基づいて信じ、感謝します。

人は、人の心を変えることはできません。しかし、私自身が神様によって変えられたように、神様はおできになります。

わたしは彼らに一つの心を与える。すなわち、わたしはあなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。

（エゼキエル　11・19）

愛する子どもとの間でも心が通い合わない辛く切ない思いをすることがあります。ですけれども、主のお約束は真実で

すから、感謝します。子どもたちの救いについては、少し前まではまだ先のことであろうと漫然と祈っていたのですが、最近起こされた様々な問題を通して、子どもたちの一日も早い救いを切実な課題として祈るようになりました。

私たちは、主が宿ってくださる器となるか、或いは悪魔の支配のもとに悪魔に用いられる器となるか、そのどちらかしかありません。子どもたちが、主イエス様を心から恐れ、心から愛し、主イエス様に愛され、用いられる器とされるように切に祈っています。子どもに関する問題の解決が魂の救いにあるということを最近思わされているからです。

夜の間、夜の見張りが立つころから、立って大声で叫び、あなたの心を水のように、主の前に注ぎ出せ。主に向かって手を差し上げ、あなたの幼子たちのために祈れ。

（哀歌　2・19）

イエス様のみことばの真実を信じて、心から感謝します。

私が今このようにしていられるのはイエス様の憐れみ、イエス様にある兄弟姉妹の愛と赦しと慰めと励まし、ただそれ故です。私の内にある醜（みにく）い思い、兄弟姉妹に対してですら沸き起こってくる高ぶりや妬（ねた）み、偽善、無関心、愛のなさ、怠慢、自己中心、そういったもの故に、イエス様にごめんなさいとしか言えません。忍耐してくださり、愛し、支え続けてきてくださったイエス様と兄弟姉妹に心から感謝します。

イエス様と共に歩む人生は言葉に言い尽くせないほど素晴らしいです。イエス様に救われてから、私は心から幸せだと言えるようになりました。まだイエス様をご存知でない方には、どうか、イエス様を知ってくださり、神様との平和をご自分のものとしてくださいますように心からお祈り致します。

小池純子／一九七二年生まれ
ジャカルタ日本人小学校・中学校卒、日本女子大学附属高等学校卒、日本女子大学卒、東京学芸大学卒
夫　克明、長男　直（すぐ）・次男　満（みちる）・長女　のぞみ

主イエス・キリストのゆえに神に感謝します、この恵みに

平良　久美子



左から3人目、久美子さん、みなさんと

証しを書くようにとのお話しを受けた時、自分の歩みには書き記すほどのものはない、と思いました。しかし、私の歩みのつたなさ貧しさはどうでもよいのではないか、主イエス様がどのように導いてくださったかを書き記すことがみこころではないか、との思いが与えられました。私自身に与えられた病を通しての恵み、家族の救いの恵み、石垣島でイエス・キリストの交わりを起こし、そして、すべてを益に変えてくださるイエス様の恵みを伝えたいと思いました。

私は那覇市で七人兄弟の第五子として出生し、二人は幼くして召されたのですが、天国で両親と共に憩っていると確信しています。残された五人のうちの四人はすでに救われ、今は家族の救いを約束しているみことばに感謝しつつ長兄の救いを祈り待っているところです。

1乳ガンの病を通しての恵み

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私は

それであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

（詩篇　119・71〜72）

小学二年生の時、当時通っていた石川市の宮森小学校に米軍ジェット戦闘機が墜落し、トタン葺き校舎はまき散らされたジェット燃料で激しく炎上しました。私自身は教室が炎上する前にミルク給食当番で教室を離れていて助かりましたが、クラスの友達が数名亡くなりました。このことによって私は、死の恐怖とともに、何か予想もしないことがおこるのではないか、という漠然とした恐怖に取り付かれるようになりました。

子どもの頃の私は、成績の優秀な姉や兄に囲まれて居場所がなく、劣等感の塊でした。そのような中で、姉に買って貰った聖書物語を読むことが慰めでした。小学生の頃は姉に連れられて日曜学校に行くこともありましたが、中学生になると教会に行くことはなくなりました。高校生の時は、進学に夢中になる友人たちの輪に入ることもできず、何のために生きているのか思春期特有の悩み・孤独の中で、近くの教会に行くようになり、受洗の恵みに預かりました。女性の伝道師の方が暖かく迎えてくださり、苦しい高校生活の中でのびのびと過ごせる唯一の場所でした。

その頃、兄の友人が京都の看護学院で学んでいることを知り、夏休みなどで帰省する時の交わりを通して、私も看護の道を進みたいと思うようになりました。主の導きと兄の影響もあって、私も京都の看護学院で学ぶことになりました。看護学院を卒業し、五年間京都で過ごしてから、母の病気の介護を兼ねて保健師学校に進学するために沖縄に戻りました。半年後に母が召され、その後保健師として働くことになりました。

最初の赴任地が石垣島でした。私は教会を探し、バスで一時間ぐらいかかる町まで日曜日ごとに通いました。そして三年間、駐在保健師を務めた後、本島へ転勤となり那覇に戻りました。家では、心の病の兄、年老いた父との生活からくるストレスがあり、また満たされない教会生活等々で疲れ切っていました。主との交わりも乏しくなり、何処に向かっているのかもわからず、ただただ仕事に居場所を見つけるしかありませんでした。仕事は私の偶像でもあり、唯一プライドを満たすものでした。

そのころ、姉の友人であるスラッシャー姉妹から、ベック兄弟が数ヶ月間隔で沖縄で集会を持っていらっしゃることを教えていただき、教会とかけ持ちで集うようになりました。「こんなにもすばらしい救い」というタイトルの福音メッセージを録音テープで聞き、涙したことを思い出します。二年ぐらい集った頃、教会とのかけ持ちでいいのだろうか、と思うようになり、自分の礼拝の場を問われるようになっていました。ベック兄から「軽井沢での福音キャンプに参加してみませんか」と声をかけられたこともあり、イエス様に祈りながら、福音キャンプに集いました。主が後押ししてくださったのだと思います。

わが子ソロモンよ。今あなたはあなたの父の神を知りなさい。全き心と喜ばしい心持ちをもって神に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。もし、あなたが神を求めるなら、神はあなたにご自分を現わされる。もし、あなたが神を離れるなら、神はあなたをとこしえまでも退けられる。今、心に留めなさい。主は聖所となる宮を建てさせるため、あなたを選ばれた。勇気を出して実行しなさい。

（1歴代　28・9〜10）

軽井沢のキャンプから戻り、教会を出る決心に導かれ、十人足らずの首里集会で礼拝するようになりました。まるで、私の決断を待っていたかのように、それから三ヶ月後に乳ガンが与えられました。

因果応報のような考え方にとらえられていた私は、予防活動を仕事にしていたのになぜ、と医学や看護の知識によって責め立てられました。周りの方々が何気なく「何が原因なの」と問いかけてくださることばにも私の心は厳しく責め立て

られました。内からも外からも責め立てられるようで辛い日々でした。

それまで私の誇りであった健康、偶像となっていた仕事のプライド、そういったすべての問題が明るみに出され、私は自分の信仰が問われる試練と恵みを受けたのです。「病は神様の恵みですよ」と言い切るベック兄のことばは、知識としては受け取れるのですが、感謝することはできませんでした。「なぜ、こんなに辛いことが私に起こるのですか」と、受洗から二十年たっていたにもかかわらず、信仰がぐらついて、祈ることもままなりませんでした。しかしこの出来事によって、罪の赦しと天国の確信が自分にはない、ということを胸に刻むことができたのは恵みでした。

ただ、その時はまだ動揺の中にいて、主のみこころとは遠いところにとどまっていました。ですから、集会の平良芳子姉が手術室に向かう私に読んでくださった聖句、「私のたましいを御手にゆだねます。真実の神、主よ。あなたは私を贖い出してくださいました。あなたは、私の悩みをご覧になり、私のたましいの苦しみを知っておられました。あなたは私を敵の手に渡さず、私の足を広い所に立たせてくださいました」（詩篇31・5、7～8）、このみことばにとめどもなく流した涙は、自己憐憫の涙でした。

その後も、手術の経過が悪く多量出血もあり、集会の姉妹たちとの交わりで喜んだかと思うと、死の恐怖や将来への不安を抱く、という浮き沈みの激しい毎日でした。しかしある時、信仰の友から送られた寄せ書きの中の「イエス様を信じ抜いてください」ということばに、私は釘付けになりました。病気を通して自分の信仰の幼さに絶望していましたので私自身にはできそうにないけれども、イエス様がそれをなしてくださる、との思いが心に響いてきました。それからは「なぜ病気になったのか」の因果応報のような考え方を離れ、「何のために」イエス様は何をなさろうとしているのか、との考え方に導かれました。イエス様の赦しを自分のこととして受け止めることができ、また良心の呵責、死の恐怖からも解放され、清々しい気持ちが与えられたのです。兄弟姉妹のとりなしの祈りに支えられていた、と今振り返って思います。

今こそ、私は知る。主は、油をそそがれた者を、お救いになる。主は、右の手の救いの力をもって聖なる天から、お答えになる。ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

（詩篇　20・6～7）

2家族の救いの恵み

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。

（詩篇　121・1～2）

学生結婚して京都大学医学部で学んでいた兄は、精神の変調により療養を繰り返しながらも勉学を続けて卒業し、沖縄で暮らすことになりました。父は、期待の息子の病に落胆して、親戚の方々との交わりも避けるようになっていきました。そんな中で、「イエス様の話は聞きたくない」と最初は関心を示さなかったのですが、集会の兄弟姉妹たちと交わるようになり、福音を受け入れ、兄のことも「イエス様に任せるしかないね」と言いながら、喉頭ガンの療養の中で安らかに天に帰りました。

兄の心の病はますます悪化し、自分を閉ざし、家族と語ることはなく、周りの方々との交わりもありませんでした。下血するようになっても受診を拒否し続けました。私は、弱ってゆく兄を前に、「イエス様、家族の責任はどこまでですか？」の祈りを捧げるのが日課になっていました。誰もいない時に召されたれらどうしようか、と思い煩うことも度々ありました。歩くことも困難になった頃、集会の兄弟たちの協力を得、その見守りのうちに三時間あまり説得したところ、やっと説得に応じ、精神科の病院に入院する道を主が開いてくださいました。二十年以上も精神科の治療を拒否し続けていた兄は、着替えでもお金でもなく、愛用の聖書一冊だけを持って入院し

いとの思いが与えられ、家族は慰めをいただいています。主がなされた奇跡としか言いようがありません。

3石垣島で集会が起こされた恵み

真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。

（ヨハネ　4・23〜24）

石垣島は沖縄本島の那覇市から南西に約四三〇キロ離れた海洋に浮かぶ亜熱帯の自然が美しい島です。一九九八年四月、沖縄集会の平良芳子姉が石垣島の保健所に転勤されることになり、私は、石垣島に住んでいる金城道子姉に会ってほしい、とお願いしました。私の兄と離婚して石垣島で暮らす道子姉とは交わりが与えられていましたので、キリスト集会の兄弟姉妹との交わりを通し、家族との会話も取り戻し、召される二日前には、別れた妻子との再会をも主は導いてくださり、主に抱きかかえられ、主のみもとに帰っていったのでした。人間的に衣食を満たすことはできても、彼の魂の苦しみに対しては、私たちは全く無力でした。人の目には孤独な人生だったのかもしれません。心は病みつつも主イエス様にのみすがっていた苦難の人生は、一粒の麦として、父の救い、また交わりや葬儀を通して主の栄光が現わされたことなど、豊かな実を結んだと思います。

召天後、部屋を片づけたところ日本語、英語、中国語等の聖書が五十四冊見つかりました。とても驚きましたが、彼は自ら周りとの関係を閉ざし続け、その茨の道を歩む中でも主イエスとの交わりの中で心を開いていたのだろう、と思わされました。辛い時はイエス様が彼を背負って歩んでいたに違いないなり、悩みながら教会に行っている数人の方々の名前があがり、祈りつつ福音テープや「光よあれ」の本を持って訪ねました。その方々は初めのうちは、警戒していましたが、しだいに親しくなり、主にある交わりへと導かれるようになりました。一九九八年七月頃からは兄弟も加えられ、平均五〜六人で兄弟姉妹の自宅において礼拝が持たれる様になりました。少ない時は姉妹だけ三人で朝礼拝や夕礼拝を捧げ、やがて聖餐の恵みにも預かるようになりました。十一月には、沖縄キリスト集会から三人の姉妹と西表島からも兄弟姉妹が加えられ十二人で礼拝を捧げることもありました。一九九九年一月に、宮古喜びの集いの後でベック兄姉はじめ東京や沖縄キリスト集会の兄弟姉妹十数名が石垣島を訪ねてくださり、初めて石垣島で公の集会がもたれることになったのでした。

これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。

（詩篇　118・23）

ました。

統合失調症、糖尿病、下肢壊死、直腸末期ガンと診断されても延命を望まず、入院から昇天までの二年間はキリスト集会の兄弟姉妹との交わりを通し、家族との会話も取り戻し、召される二日前には、別れた妻子との再会をも主は導いてくださり、主に抱きかかえられ、主のみもとに帰っていったのでした。人間的に衣食を満たすことはできても、彼の魂の苦しみに対しては、私たちは全く無力でした。人の目には孤独な人生だったのかもしれません。心は病みつつも主イエス様にのみすがっていた苦難の人生は、一粒の麦として、父の救い、また交わりや葬儀を通して主の栄光が現わされたことなど、豊かな実を結んだと思います。

召天後、部屋を片づけたところ日本語、英語、中国語等の聖書が五十四冊見つかりました。とても驚きましたが、彼は自ら周りとの関係を閉ざし続け、その茨の道を歩む中でも主イエスとの交わりの中で心を開いていたのだろう、と思わされました。辛い時はイエス様が彼を背負って歩んでいたに違いないのことも伝えていました。私の姉もベック兄の福音メッセージのテープを渡していたようです。また、石垣島でも集会が持てたら、との願いもありましたので、平良芳子姉妹の石垣島への転勤をきっかけに是非会ってほしいと祈りつつ話しました。しかし、その頃の私たちは、それが石垣島で集会を起こそうとされる主のご計画の一端であることを知るよしもありませんでした。

石垣島での集会の誕生については平良芳子姉妹が直接にかかわっておられましたので、芳子姉妹からの聞き取りをここに記します。

『石垣島に住む道子姉とは顔も知らない者同士でしたが、二人の祈りもあり、病院と保健所の保健業務を連携する仕事を通して、赴任して早い時期に自然な形で、また不思議な方法で会うことを主が導いて下さいました。その頃、道子姉は教会へ通っておられ、悩みを抱え、喜びがないとのことでしたので、交わりを持つことに抵抗はなく、長い時間の交わりが何度か与えられました。そして、二人で祈り会を持つように

遠い南の島に福音を運ばれた主のみわざに、ただただ感激し喜びました。石垣島の姉妹方の親族・友人が加えられ、数十人の集いになりました。主は二〇〇〇年一月に沖縄集会へ当番で来た兄弟を石垣まで遣わしてくださり、沖縄集会の兄姉を含めた二十一人で三日間の石垣島・西表島・由布島と強行スケジュールの伝道旅行でしたが、主に守られ豊かに祝福された恵みの集いとなりました。

西表島には空港がありませんので、石垣島から船で移動して、福音集会を開きました。由布島は西表島から浅瀬の海の中を水牛車で渡ります。吉祥寺集会の姉妹から、その島に八十歳の叔父がいるのでお交わりくださいと依頼され、その方との交わりも与えられました。主の恵みとしか思えません。その後ベック兄姉が再度来てくださり、ホテルで集会が行われ、多くの未信者の方々も信仰に導かれました』

二〇〇〇年三月に平良芳子姉は那覇へ転勤することが決まり、石垣島の姉妹たちは落胆したそうです。それを聞いた沖縄集会は、石垣島の姉妹たちとともに、石垣集会が祝福されるように祈りました。その頃私に、晴天の霹靂とも言うべきでしょうか、離島勤務の内示がありました。父を天に送り兄と同居していたのですが、心の病を持つ兄を一人置いての離島勤務はとうてい不可能と思われました。しかし、将来の離島勤務に備えて心の準備をしておくことが必要であることは明白でした。自問自答しつつ祈り、沖縄集会の兄弟姉妹方にも祈っていただき、主にお答えを求めました。こうして、数日で結論が与えられたのです。

イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう。」と言われた。

（マルコ　4・35）

長兄、姉の協力のもと、私は芳子姉と入れ違いに石垣島の保健所に二〇〇〇年四月、赴任しました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

その後、二〇〇〇年四月から毎日曜日、石垣集会の姉妹宅のプレハブ小屋で礼拝が行われ、西表島からも集う方がありました。その年の九月には重田定義兄姉をお迎えして福音の集いが開かれ、沖縄集会からも喜屋武兄姉ら五人の兄弟姉妹が参加してたいへん感謝でした。

それからは年に数回、吉祥寺集会の兄弟たちがメッセンジャーとして石垣島に来てくだいました。沖縄集会の兄弟姉妹も共に集い、祝福された福音集会が持たれ、親族、友人、知人たちがが集められました。石垣島の姉妹たちは、偶像に囲まれた島々で救いを求める人々へ、農業の仲間たちへ、あるいは農産物の販売を通し出会う知人へ、あるいは病院勤務を通し病める方々へとイエス様を紹介し、あらゆる機会を用いて主を証し続けていました。このようにして、導かれる方々は次々と与えられ、目を見張るほどでした。

その間、台風銀座と言われる沖縄航路ですが一度も台風で集会が中止することはありませんでした。私は二年間の勤務を終え二〇〇二年四月に、沖縄本島へ戻りました。その後、自宅も開放してくださっていた兄弟が集会を去ることになり、とても心を痛めました。しばらく主の前に静まるようにとのことだったのでしょうか、メッセンジャーによる福音集会は閉ざされることになりました。

最近はまた新たに、吉祥寺から兄弟が沖縄集会に来られた際に、沖縄集会の兄弟姉妹と共に石垣島までメッセージを運んでくださるようになりました。しばらく閉ざされていた福音集会でしたが、主はふたたび道を開いてくださっています。福音集会が閉ざされている間も石垣島では、姉妹の自宅、時には公園の一角でというふうにして祈り会や礼拝は今に至るまで熱い思いを持って続けられてきました。沖縄で持たれる喜びの集いでは石垣集会と沖縄集会の兄弟姉妹、各地の集会から来られた兄弟姉妹との交わりが与えられ、恵みを分かち合ってきました。

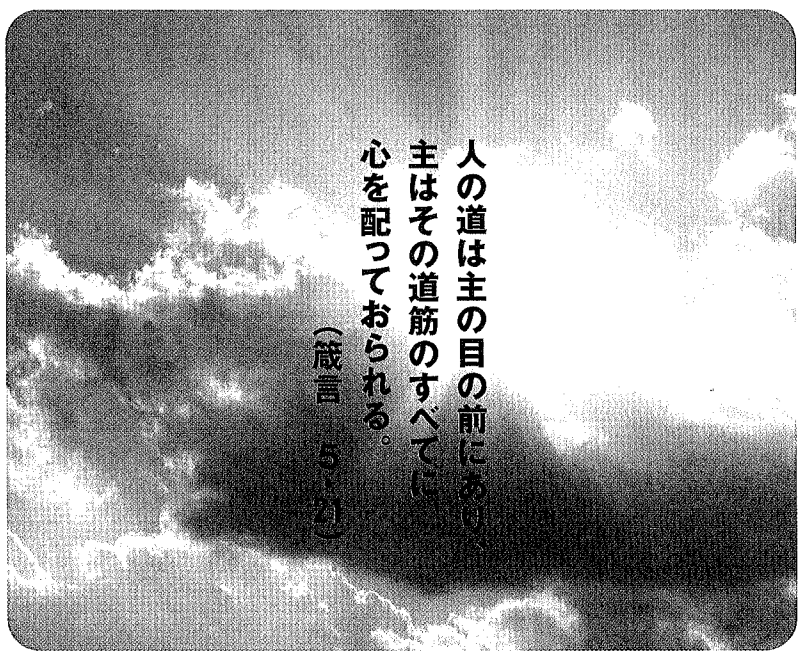
振り返って思うことは、救いを求める魂へ働かれるイエス様

のご計画はあまりにも不思議、そして今も生きて働かれる主に感謝するのみです。石垣島でも喜びの集いが持たれるようにと祈っています。

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。

（イザヤ　25・1）

平良久美子／沖縄県出身、バプテスト看護学院、沖縄県看護学校保健学科卒、中部福祉保健所勤務



みことばは生きて働きます

勝野　幸一



幸一さん、妻の由紀さんと結婚式で

私は、一九六八年に母の実家である、岐阜県中津川市で生まれ、長野県で育ちました。家族は、父が十年余り前に天国へ召されましたので、現在は母、姉、甥二人が長野県茅野市で生活を送っています。

私は幼少から、父が理科の教師をしていたこともあり、長野県の山々の自然に触れることが多く、山や川へとよく遊びに行きました。当時から植物や昆虫に触れることが大好きだったので、朝から晩まで真っ黒になって自然の中をかけずりまわっていました。現在は、東京にある株式会社グリーン・ワイズで、主に造園の仕事に携わっています。具体的には、玉川高島屋の庭園を中心に、植物の管理とデザインの仕事をしています。こうして都会にいながらも、幼少から好きだった植物の世界に身を置けていることは本当に喜びです。

イエス様と初めて出会ったのは、今から二十年前の二十四歳のとき、きっかけは母を通してでした。当時の母は、祖父母の介護で疲れきっており、ストレスが溜まっていて怒り

やすく、私も些細なことでいつも叱られていました。

その母が知人の紹介によって、キリスト集会に集うようになりました。信仰をもった母は、それまでとは違って本当に優しくなり、笑顔の毎日に変えられていました。家庭内も急に明るくなり、尻に敷かれていた父は尊敬されるようになり、私と姉もまったく叱られなくなりました。本当に考えられない出来事でした。「一体母になにがおこったんだろうね?」と家族みんな不思議に思っていましたが、そういう感じで、イエス様が我が家に入ってきてくださいました。

そんな中、ある日、母が私たち家族に「御代田の集会へ行ってみない?」と誘ってきました。

それまで私は、イエス・キリストや、教会というものに全く関心がなかったのですが、母がこんなに変わった理由を知りたくなり、生まれて初めて御代田の日曜礼拝に参加しました。礼拝堂には多くの方が集っており、聖歌の大合唱が聞こえてきました。日々の歌213番「神より下りし山に」という歌でした。私は、一番後ろの空いていたイスにひとりで座って聴いていました。今でも、そのときの綺麗な大合唱の歌声が自分の心に自然に入ってきて感動したのを覚えています。それまで経験したこともない思いで、安心感とともに、またここに来て座っていたいという思いが沸いてきました。

その日ベックさんにもお会いし、イエス様の話を初めて聞きました。それまで自分の中では、安心する場所というものは自分の家しかなかったのですが、もうひとつ「イエス様に会える場所、帰る場所ができた」という思いが自然に生まれました。

しかしながら、学生時代から親元を離れ都会でひとり暮らしをしていた当時の私は、相変わらず野心にあふれており、好き放題の生活を続けていました。私は学生時代からずっと接客サービス業に興味を持っており、夜の世界が大好きになっていて、そういう世界で生きていきたいという思いが当時は強くありました。アルバイトではじめたバーテンダーの仕事にはまり、夜の世界におぼれていきました。

大学四年生のときになっても、就職活動はまったくせず、夜の世界でスカウトされた仕事に就き、お金に埋もれた世界で何年か過ごし、危険な世界へと足を踏み入れようとしていました。今では考えられないのですが、当時は、その世界に身をおいていることが自分にはとても合っていると思えました。聖書に放蕩息子ということばがでてきますが、本当に当時の私はこの放蕩息子であったように思います。そんな私でしたが、バブルがはじけたことをきっかけに、夜の世界から昼の世界へと移行するときが与えられました。今考えると、闇の世界から抜けられない私をイエス様が守ってくださり助けてくださった、と確信できます。

二十五歳になって初めての就職活動をすることになり、知人からの誘いもあり、ホームセンターに就職することができました。しかし、就職後も金銭感覚がわからなくなっていた自分にとっては、普通に仕事をすること、汗水流してお金を得る、という感覚が身につかず、苦しい日々が続きました。その当時は、自分は強くなければならない、人になめられてはいけない、強いものでありたいなどと思っていましたので、聖書のみことばに頼ることは弱い人間がすることと受け止めていて、聖書はとても遠い存在となっていました。父や母からみことば入りの手紙が何通も送られてきましたが、あまり読みませんでした。ただ、必死にがんばっていましたが、あるときから急に仕事に行けなくなりました。疲労困憊(こんぱい)で心身ともに疲れきってしまい、不安から来る心の病気になりました。何ごとにもやる気が無くなり、自分では何もできない状態になりました。

自分で自分をコントロールできなくなり、会社を休むようになり、静められた時間の中で、初めて聖書を読むことができました。また、母からの手紙を読みながら、初めて御代田の礼拝堂へ行ったときのことを思い出し、あの安心感にまた触れていたいという思いにもなりました。その当時、母が送ってくれた手紙に、次の聖書のみことばが書かれていました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

それまでにも聖書を持ってはいたものの、ゆっくり、心を静めて読むことがなかったのですが、このとき初めて、本当に、ひと文字ひと文字ゆっくりとこのみことばを読み、みことばが心に入ってきました。このみことばに触れたことで、今でも理解できないのですが、不安がなくなり、なにか心の奥がとても暖かい気持ちになって、安心感が沸いてきました。

この頃からだと思うのですが、「不安」と「平安」について意識するようになりました。仕事をしていると、人間関係が原因で不安になることがよくあります。不安になる原因を考えると、よくわかるのは、自分で物事を考え、コントロールしようとしているときにおこるものだということです。自分はこうありたい、世間的には普通こうだから、自分もこうあらねばならない、とか。自分はこう考えるのに、どうして相手はわかってくれないのだろう、とか。すべて、自分の中にある自我というものが生みだしていることに気付かされました。

心の病になり、自分の考えで自分をコントロールできなくなったとき、初めて自我というものが弱められて、イエス様のみことばを「食べる」ことができました。その時に、不安が平安に変えられました。このことは、自分で理解しようとして得られたものではなく、自然にそう思えた体験でした。

イエス様は目には見えない存在ですから、それまでの私はイエス様はいない、としか考えられなかったのですが、みことばを読んで無条件に心が平安になったこと、弱ったときに助けていただいたこと、また、以前に母が変えられたことなど、――これらの体験を通して、「ひょっとしたら本当にイエス様は存在しているのかもしれない、本当に私を助けてくださったのかもしれない」という思いが生まれました。

このようにして、大切なのはイエス様が存在するということだ、という思いが与えられました。

それからすぐに私は、自分中心の生き方から離れることを決心し、イエス様の側につきたいという思いになり、父と母に声をかけ、家族三人で受洗しました。このことをきっかけに、お医者さんの処方薬（抗生物質）では治らなかった病から解放され、仕事に復帰することができました。このあとも、仕事とプライベートなことを通して常に不安と平安を繰り返していますが、今も、聖書のみことばが不安を平安へと変えてくれています。

こうして、以前思っていた「弱い人間でありたくない」という思いはいっさい消えて、「もともと人は孤独で弱いものなんだ、だからイエス様が一方的な愛でこんなどうしようもない自分を守ってくださっているんだ」と受け止めるようになりました。

少し話しは飛びますが、天国へ召された父のことお話ししたいと思います。父は教師として生物学を専攻しており、長野県の河川の水質調査の研究のため、川へよく出かけては水生昆虫の採取に取り組んでいました。私も父の付き添いでよく川へ行っていましたが、私は、父とは本当に仲がよく、いつも友達のように一緒に出かけていたことを思い出します。父は理論派で、理屈に合わないことは受け入れないという頑固な人でしたが、先ほどお話しました私の病を通して無条件にイエス様を受け入れるようになりました。

そんな父に病が与えられたのは、私が三十三歳になったときのことです。現代の医学をもってしてもどうにもならない心臓の癌でした。はじめは、お医者様から良性のものだから心配ないと伝えられほっとしていましたが、一回目の手術後に悪性のものと伝えられ、家族中が不安に陥りました。世界的にも稀な病でした。父は、心臓の中を切り開くために心臓を止めての手術を二回も受けたのですが、そんな苦しい中にあってもいつも笑顔でした。父のベッドの周りやパジャマのポケットの中にはたくさんのみことばカード

が入っていて、いつもイエス様にお祈りをし、病の中でも常にみことばに触れていたようです。その父が当時持っていたカードの中にあったみことばは次のものです。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。（イザヤ　41・10、13）

苦しみの中にあっても、父はみことばによって平安を与えられていました。父は、自分の苦しみのことではなく家族のことを、またお見舞いに来てくださった兄弟姉妹のことをお祈りしていました。集会の方たちからのお祈りに支えられて、入退院を繰り返していた父でしたが、それから一年後の十二月十四日に主の時を迎えました。

その日、大学病院に家族全員が集まり、薬で眠っている父を見守りました。姉と母と私が少し話してから病室を出ようとしたとき、突然脈拍計の音が鳴り響き、一緒に病室にいた看護婦さんが急いで先生を呼びに行かれました。人工呼吸器につながれ、薬で寝たきりの状態であった父は、音が鳴った瞬間に体がぴくりと動き、目がかすかに開きました。母は父にむかって「たくさんの愛をありがとう」と叫び、私は声を出してお祈りしました。そして姉が賛美をはじめ、そばにいた看護婦さんも一緒に歌ってくれました。父は、苦しかった闘病生活から離れ、イエス様のいる天国へと導かれました。父の顔は本当に安らかでした。

その時、私が父の姿を見て思ったのは、イエス様の姿のようだ、ということでした。十字架につけられ、死なれたイエス様を見ているようでした。そこにはよみがえりの希望が満ちていました。私は、本当は悲しいはずなのに、その時は何故かとても爽やかな気持ちでいっぱいになっていました。母も私と同じ気持ちであったようです。「父はこの世の肉としての苦しみから解放され今は天国へ導かれたのだ！」

と、本当にそう思えた瞬間でした。

父が書き残した家族宛の手紙には、「人間は必ず一度死ぬ。しかし時間の違いでまた天国ですぐ会える。私たちの国籍は天にあります。これからは、どんなことがあっても、主により頼み、祈り、みこころは何か、聖書はなんと言っているか、共に考え合って、その中に生き方を見つけてください」と書き記されていました。父の死を通して、私は、イエス様から本当の愛というものを与えられたように思います。

最後になりますが、由紀さんとの結婚へと導かれた話しをさせていただきます。二人が初めて出会ったのは、二〇二年の十月二十三日でした。その日は日曜日で、私は久しぶりに家族と共に御代田の礼拝に集いました。私は東京に住んでいましたので、本来なら御代田まで来ることはなかったのですが、その日には母方の祖母が御代田の礼拝に出席されると聞いて、祖母に会いたいという気持ちで御代田へ出てきました。由紀さんを紹介されるとは思いもしませんでした。

由紀さんのことは集会の姉妹の方からお話を頂きましたが、信仰の薄い私は、紹介されることに抵抗を感じ、どうしても受け入れられない思いでいました。それでも母が一目あってごらんと言ってくれたので、会うことにしました。

礼拝堂の中には由紀さんがいて、彼女は笑顔で迎えてくれました。考えられないのですが、その瞬間に、イエス様からだ‥と、思いました。さっきまで拒んでいた私はそこにはなく、とても平安な気持ちと、幸せな気持ちでいっぱいになりました。その日は、突然だったこともあり、お互い、ほとんど何も話すことができなかったのですが、アドレスを交換することができ、その日から彼女とのメール交換の日が続きました。その頃は仕事が大変なときで、過密な生活をしていましたので、由紀さんとは、メール交換を通して話すことしかできませんでした。

そんなある日、会社の管理部門の重要な会議で不安な朝を迎えました。メールで、由紀さんにお祈りのお願いをしまし

た。その重要会議では、会社の課題である人事の問題に意見が求められる予定でしたので、本当に朝から苦しい思いでした。しかし、会議は急展開し、全く違う方向で進むことになったのです。

とても平安な気持ちになり、祈りが聞かれた喜びと、嬉しさで、いっぱいになりました。これまで、仕事のことを、自分でお祈りをしたことはあっても、具体的なことで他の人にお祈りをしてもらうことはなく、由紀さんにお祈りをしてもらったのが初めてだったので、本当に嬉しい思いでした。

祈りあうって本当にいいなと思い、私の中で心が動きました。これまで、結婚ということに意識はあっても、したいという思いはなかったのですが、その日、結婚したいという思いが自分自身に与えられました。由紀さんと一緒に祈りあう歩みをしていきたいという思いでした。そして、「明日、話したいことがあるので、会ってほしい」と由紀さんに連絡をして会うことになり、私は仕事が終わったあと、東京から新幹線で長野へ向かい彼女と会いました。二時間ほどだったのですが、いろいろな話をして、その日に、自分の思いを由紀さんに伝えました。…「僕の助け手になってください！」とプロポーズしました。

しかし、一ヵ月を待っても彼女から返事がなかったので、おかしいな～と思い、恐る恐る彼女に返事を聞きましたが、由紀さんからは、「え？　なんのこと？」って言われました。由紀さんは、僕がプロポーズした、「助け手になってください」の意味がどうやらわからなかったようで、「助け手かぁ～。私のほうが助け手になってもらいたいくらい」と…ずっと思っていたようです。私にとっては、断腸の思いでのプロポーズでしたので、ショックでした…。

でも、それからは、電話とメールのやりとりが頻繁になり、一日の終わりに必ずみことばを拝読してお祈りをする平安な毎日が続きました。その中で、お互いの辛かったときの話や、どうしてイエス様と出会えたのか、お互いの体験を通して、話すことができました。そして、イエス様が僕たち二人を引き合わせてくださったのだ、ということを二人で確信することができ、結婚へと導かれました。

由紀さんの口癖で「私はなんにもできないんだよ」、「本当に私はだめな人間なんだよ」といつも言ってくれますが、私はその言葉が大好きです。なぜなら私は、自分が「いけてる」と思った瞬間にいつも崩されて、だめになる体験をして、本当に自分はだめなどうしようもない人間だ、といつも思えるからです。だめな人間と自分を認めたときに、イエス様を受け入れることができ、平安が与えられます。僕たちは本当にだめなままで、これからも変わることができないけど、でもそんな僕たちのことをイエス様は「そのままでいいんだよ」って言ってくださっていること、本当にイエス様に感謝します。最後に二人に与えられたみことばをお読みし、終わりにしたいと思います。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇　119・71）

このみことばに従ってこれからも、由紀さんとともにイエス様に祈りあって、ともに歩んで生きたいと思います。

勝野幸一／岡谷市立長地小学校、
茅野市立茅野北部中学校
長野県立下諏訪向陽高校、流通経済大学、
現在、株式会社グリーン・ワイズ勤務、
玉川高島屋ＳＣ庭園管理

イエス様は愛してくださっています

勝野　由紀



左から2人目、由紀さん、ご友人たちと

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。（創世記　2・7）

この世界のすべてをつくられたイエス様に出会えたことを心から喜び感謝しています。私がそう思えるようになるまでにイエス様が頑固でわからずやの私に必要な経験を与えてくださいました。そのことをお話しします。

私は長野県中野市に生まれ、両親と、兄ひとり、妹ふたりの家族の中で育ちました。小さい頃は兄の後を付いてよく一緒に遊んでいたことを思い出します。小学校にあがってからも、友達や妹と外で遊ぶことも多く、どちらかというと活発な方だったかもしれません。でも、本を読んだり、ひとりでいる時間もとても好きでした。

私は小学生の時にイエス様を信じました。そして家族でキリスト集会へ集うようになり、家族みんなでお祈りをすることが日課になっていました。中学生になってからは、運動部に入り、大変でしたが、がんばった分上達することが楽しくなっていきました。いつもお祈りして練習をしていました。勉強は、とても優しく大好きな兄のがんばっている姿を見て、やる気を与えてもらっていました。

私は頑固でわがままな性格ですが、兄やふたりの妹は素直で優しく、私もいい性格になりたいといつも思っていました。

小学校、中学校は友達も先生も大好きで楽しく過ごしました。高校では、大好きな友達ができ、楽しいことをしたり、いろいろな事を話したり、よく笑ったり、振り返ると楽しかった思い出がたくさんあります。しかしその頃から集会へ行くことが少しずつ減っていき、日課だった家族でのお祈りはなくなっていきました。ただ、何か聞いてもらいたいことがある時にだけお祈りしていました。集会へ行かなくなったことについては、私はそれでもいいと思っていました。

高校二年生の終わる頃、私は些細な出来事をきっかけに、人と接することに異常なほど神経質になってしまいました。それまでのように普通に話したり笑ったりすることができなくなってしまい、突然だったので、ただもう、「どうして、どうして」という思いでした。状態はどんどんひどくなっていき、学校生活の何もかもが苦痛になっていきました。授業中は息苦しくて具合がわるくなり、授業を抜け出したこともありました。つらくて泣いていた私に友達が一緒にいてくれたことを思い出します。本当に私は友達の存在に助けられていました。

この悩みは友達にも家族にも話しませんでした。誰にも知られたくないと思っていました。今まで通りの自分を装おうとしていることでさらに精神的に疲れていました。

そして高校を卒業して短大に入学しました。私はとにかく家を出たかったために、卒業したら帰ってくるという条件で東京に出させてもらいました。

東京では親戚のおばさんの家に同居させてもらいましたが、本当にひとりじゃなくて良かったと思っています。おばさんの家は唯一ほっとできる場所でした。まったく新しい環境になる

ことを期待をして出た東京ですが、実際は苦しい毎日が待っていました。通学の電車の中、学校での友達関係、アルバイト先、ほとんどすべての場所で常に緊張して気が休まるところがありませんでした。体にも影響がでてきた時は病院に行くことも考えましたが、勇気がありませんでした。本当につらくて、電車の中でお祈りしたり、夜は寝る前にお祈りをしていました。イエス様はいつかきっと治してくださると思いながら、毎日祈っていました。

短大を卒業し、長野に戻りました。また新しい環境、人間関係のことを考えると怖くて就職活動はできませんでした。でも、このままではいけない、自分がもっと駄目になってしまうという思いがあり、その頃、親にすすめられた資格をとって病院に勤めることになりました。人と接する仕事でしたが、慣れれば人に対する恐れを克服できるかもしれないと思い、がんばってみることにしました。でも、仕事として患者さんと接することだけではなく職場での人間関係にも常にストレスを感じていたので、家に帰ると精神的に疲れきっていて、何もできず、すぐに横になる毎日になっていました。その頃のお祈りは形だけになっていました。イエス様にお祈りするよりも悩みを忘れようと他のことに頼るようになっていき、自分のことばかり考えて生きていました。

そんな自分勝手な生き方をしていた私に、さらにある問題が与えられました。逃げたくても逃げられない状況に置かれ、毎日ストレスと苦しさを感じていました。自分でどうにかしようとしてもどうすることもできませんでした。今までのように生活を続けることができなくなり、仕事をやめ、そして関係のない友達を巻き込み傷つけてしまいました。すべては自分の弱さと身勝手さが招いた出来事でした。

ひとつの事から、どんどん悪い方向に向かい、何もかもがだめになっていく感じでした。私はこれからどうしたらいいのか本当にわかりませんでした。自分のしてしまったことに後悔し、どうすることもできない状況にただ毎日泣いているだけでした。自分には解決できない問題を抱え絶望的な思いでした。頭痛がひどくなり、朝になっても起き上がれず、考えることは悪いことばかりでした。病院に行けば治ると思い、薬を飲むようになりました。うつ状態になっていました。でも、調子が悪いと薬の数を増やす、といった繰り返しで薬はどんどん増える一方でした。そして、すべてのことを母に話すことにしました。母はそれまで何も知りませんでしたが、少し前からの私の行動や様子がおかしいことを心配していました。

同じ時期に、家族の中にもある問題が起きていて、母も精神的に追い詰められていました。集会へ行かなくなってから十年近く経っていましたが、御代田集会に集うことになりました。私はただいるだけで癒され、温かい気持ちになる集会が楽しみになっていきました。そして、そこで初めて、キリスト教などの宗教は人間がつくったもので、イエス様は宗教には無関係だということを知り、驚きました。私はイエス様を信じることは、キリスト教に入ることだと思っていたからです。

飲んでいた薬は増え続け、副作用がひどくなり家族を心配させていました。何のために治そうとしているのか、何を治そうとしているのかわからなくなっていました。でも、薬を飲むようになり、以前から悩んでいた不安感がいつの間にか抑えられていることに気がつきました。

私はまた前の状態に戻ることを考えると本当は迷いましたが、このまま一生何種類も薬を飲み続けることを考えるとどうしてもいやでした。そしてやめることに決めました。飲んでいた薬を全部やめましたが、体調がわるく、数日間起き上がれない状態になりました。その間家族がいつも寄り添いお祈りしてくれました。そして傷つけてしまった友達への思いはずっと心にありました。私にはごめんなさいという事とお祈りすることしかできませでした。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

イエス様を遠ざけた生活をしていた私は、本当に疲れていました。自分勝手な行いによってたくさんの方を傷つけてきた

重荷もありました。そして私は、こんなだめな私のことを見放さずに近くへ来なさいと言ってくださったイエス様に、すべてを解決していただくようお祈りしていくことにしました。この苦しみがあったからこそイエス様に出会えたのだと本当に感謝しています。

二〇二一年の十月に集会の姉妹を通して、幸一さんを紹介していただきました。とても優しそうで、印象は良かったのですが、まったくの初対面でしたし突然だったので戸惑いました。この出会いはイエス様からなのか、みこころを知りたいという気持ちと、戸惑いがあり、お断りした方がいいのかなと思う気持ちがありました。

初めてお会いしてから一ケ月の頃、直接会って話す機会が与えられました。会うことに迷いがありましたが、その日の朝、お祈りするとイエス様を強く感じとても平安な温かい気持ちになり涙が出ました。そして幸一さんと会うことはイエス様のみこころだと思えました。その時はほんの短い時間お話ししただけでしたが、この日からそれまでの迷いの気持ちが少しずつ変わっていきました。

幸一さんは東京に住んでいてほとんど会いませんでしたが、電話で会話するようになりました。ふたりでみことばを読んで幸一さんが私の不安な思いや家族のこと、仕事のこと、ふたりのこれからのことを毎日お祈りしてくれましたし、幸一さんの体験を通したイエス様の話をいつもしてくれます。イエス様と幸一さんにお祈りを通して守ってもらっている大きな安心感があり、ふたりの中にイエス様がいてくださっているんだと思うようになりました。そして、イエス様はこんな私のことも愛してくださっているということも感じられるようになっていきました。

幸一さんと出会ってからのいろいろな出来事や自分の気持ちの変化を通してイエス様は私のために幸一さんを与えてくださったと信じるようになり、結婚のこともお祈りするようになりました。自分のこれまでの歩みを思う時、イエス様はこんな私を本当に愛してくださるだろうか、自分はイエス様の愛を受けるにふさわしくないのではないだろうか、と思うことがありました。でも幸一さんと出会ってからイエス様は本当に私のことも愛してくださっていると感じられるようになりました。

こうしてふたりを結婚へと導いてくださったイエス様に本当に感謝しています。

私はこれまで与えられた経験があったからこそ、イエス様にただ頼り生きていくしかない、そうするべきだ、ということを教えられたと思っています。私はイエス様に出会えて本当に幸せです。もうイエス様から離れることはできません。弱い私ですので、結婚式を迎えるまでにも、心配したり不安になったり色々な思いがありましたが、「イエス様にすべてをお任せします。よろしくお願いします」と、心からお祈りができた時すぐに平安があり、たくさんの祝福をいただきました。

イエス様はお祈りの大切さをわかりやすく教えてくださいます。イエス様は、すべての人、こんな私のためにも罪の身代わりとなって十字架につけられ、死んでくださいました。そして三日後によみがえられ、今もイエス様は私たちのそばにいて、私たちの祈りを聞いてくださっています。本当に嬉しいです。幸一さんが以前「自分達は何も自信を持てない者だけど、自分のすべてをお任せできるイエス様に出会えたことを自信にして歩んで行こうね」と言ってくれました。これからは幸一さんと一緒にイエス様にすべてのことを委ねて生活できるようにお祈りしていきたいと思います。

聖書のみことばをお読みします。

もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。（マタイ　18・19）

勝野由紀／中野市立平岡小学校、中野市立高社中学校、長野県立中野西高校、東洋女子短期大学

7人の証し　Unser HERR lebt

打ち砕かれるべきもの

田原　栄美子



夫の穣二さん、お孫さんたちと

さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。私たちは、知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。主は暁の光のように、確かに現われ、大雨のように、私たちのところに来、後の雨のように、地を潤される。

（ホセア　6・1～3）

私は、一九五七年祖父からの会社を引き継いだ父福田栄二と、後に離婚することになる母、高橋良子の次女として札幌で生まれました。物心がつくころには両親の不和にビクビクし、表現の下手な、不器用で泣き虫な子どもでした。年子の姉と弟に挟まれ、また、五歳下に弟が生まれましたが、いつも自分の居場所がどこなのか、座れば良いのか、立っていたほうが良いのかもわからず、人の顔色を見ながら育ちました。「私を見て、私を愛して」と随分と長い間求め、そのことばかり気に掛かり、そのことを基準に人を見るような者でした。特に、父と不仲ながらも父の助け手として日々忙しい母に思いは集中し、それは、やがて小さなつまずきが重なり失望に、失望から絶望に、そして自分を守るために孤立にと向かっていきました。かなり早い年齢から、家族には信頼を置かず、自分で自分を抱きしめ、大丈夫、大丈夫と言い聞かせました。いつかわかってくれる人がきっといる、私は間違ってなどいない、と思っていました。

私は生きていることを憎んだ。日の下で行なわれるわざは、私にとってはわざわいだ。すべては空しく、風を追うようなものだから。

（伝道者　2・17）

高校生になり、父の会社は倒産、大学進学を取りやめたことも大きなコンプレックスとなり先の問題と重ね、いらだちやすく、物事や人に対して痛烈な批判をし、人の評価に自分を預けてしまい、ありのままの自分を受けいれられず、卑下と不満、疑心暗鬼で、それでも自分がかわいそうで、"正しい者"でした。そして、いつしか実の親ではないのではと疑念を抱くようになっていました。二十歳の時に不仲だった両親がとうとう離婚、ショックを受けながらもどうしても母の愛の手応えのほしい私は、父を悲しませるようなことをしました。

わきまえのない者よ。分別をわきまえよ。愚かな者よ。思慮をわきまえよ。

（箴言　8・5）

自暴自棄でさまよっているような私に、会社の上司から、ご自分の弟のように親しくしている主人、田原穣二を紹介され妊娠したこともあり、不安定なまま結婚いたしました。主人は三十八歳、私は二十五歳でした。一人っ子の主人なのだから、まもなく生まれる子どもの祖父母となる主人のご両親もきっと自分を愛してくれるのではないか、自分はこの結婚で新たにやり直せるのではないか、不安定な

自分が立ち直るのではないかと、自分のことばかりでした。

周りに目がゆかず、主人のご両親に反対されていることも知らず、幼稚なまま結婚いたしました。主人の父は私たちの結婚後すぐに心不全で亡くなり、主人の母は二十三年間一度も私の名前を呼ぶことなく亡くなりました。主人の父は育ての父で、実の父は主人が一歳二ヶ月で亡くなり、また主人の兄も主人の誕生直後に肺炎で亡くなったそうです。主人の母は子どもを産まない条件で再婚したと聞いています。

主人と私には六人の娘が与えられました。次々と子どもを与えられたことで、なんとか家族として保たれてきたような夫婦でした。こちらに来ましてからは、同じ敷地に別棟で暮らしましたが、母の家に行っていいのは主人と子どもたちだけという期間が長く続きました。自分の感情を子どもたちには言わない、出さないと自分に言い聞かせながら、主人への不満は大きく膨らんでいきました。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。（ローマ　13・1～2）

ことごとく腹が立ちました。目の前にあることに、ものに、人に、逆らい続けました。何事も「歳の順」と言って母を優先させる主人、私や子どもたちは二の次のように思えました。些細なことで大きな争いになることが、しょっちゅうでした。

あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。（ヨハネ　8・15）

高ぶりは、ただ争いを生じ、知恵は勧告を聞く者とともにある。（箴言　13・10）

人はうわべを見るが、主は心を見る。（1サムエル　16・7）

なるべく顔には出さないようにしていましたが、胸の内は真っ黒でした。

三女が生まれて直ぐに、主人の母が心酔している四柱推命の占い師から、私どもが離婚にならないためにこの子を育ての父の養女にしなさい、と提案されました。逆らえずに印鑑を押しましたがそれは長く三女を苦しめることとなりました。「自分がいいからいいんだ」という主人を理解できませんでした。

次々と与えられる子どもたち、産後病院を出ましたら何もかも一人でするしかなく、惨めで孤独でした。次女が三歳を過ぎた時に、原因不明の大量出血を何度か起こし、原因がわからず命の保証はできませんとお医者様に言われ、初めて家族旅行をしました。四女が生後六か月の時でした。主人の母とうまくやっていけないことは、外食や旅行ができない理由になっていました。ただただ負担ばかりが増し、私は何度か抑鬱（よくうつ）症を繰り返し、次々与えられる赤ん坊を前に、この子にはまだ母親が必要と自分に言い聞かせ、家事と育児に自分を紛らわせて生活していましたが限界を感じていました。

五女の幼稚園の送り迎えに、近所の軒先にかかっていたみことばに初めて目がいきました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

私は本当に疲れているとボロボロと泣きながら教会に行き「私が死んだら、こちらにいれてくださいますか」と聞きました。自分の居場所が家にないことはとうにわかっていました。翌日いただいた聖書を読んでいますと、右肩が急に暖かくなりました。まるで手が置かれたようでした。イ

エス様だと確信したのと同時に喜びがあふれました。「もう、孤独ではない」

主よ。お救いください。　（詩篇　12・1）

毎週、喜びの涙で礼拝に参列し、半年ほどで洗礼を受けました。涙ぐんで止める主人を置いてきぼりにして受洗し、主人からは離婚を言い渡されました。あまりの反対に立ち往生してしまい、教会に一年ほどで行けなくなり、教会からキリスト集会に移られていた姉妹が「光よあれ」を届けてくださり直ぐに集会に導かれました。しかし、私は自分の罪とイエス様の十字架での贖い、祈りが効かれることもわからない目も耳も閉ざされた者で、自分のことばかり考え、自分の思うとおりにしたいと家族を支配するひどい者でした。

おのれを閉ざす者は自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいする。愚かな者は英知を喜ばない。ただ自分の意見だけを表わす。

（箴言　18・1～2）

愚かな者のくちびるは争いを起こし、その口はむち打つ者を呼び寄せる。愚かな者の口は自分の滅びとなり、そのくちびるは自分のたましいのわなとなる。

（箴言　18・6～7）

まったくこのみことばのとおりの者でした。子どもの一人が中学に入り家や学校に反発をし出し、何年も追いかけては逃げ追いかけては逃げ、今までにも増して問題は増え、祈ることも従うこともせず、数年集会を離れました。

まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを

行ないました。　（詩篇　51・3～4）

主人が家族に目を向けるようになったのは子どもが問題を起こすようになった頃と思います。そのあいだに主人の母は亡くなりました。亡くなる数年前から許していただいているような気がいたしましたが最後まで打ち解けることはなく、福音をしっかりお伝えもせず、ただ主人と母の希望どおり、病院にも入らず、七ヶ月の寝たきりの状態も主人とヘルパーさんの手厚い看護の中、大切にした家で静かに亡くなりました。

特に六女が五歳の時でしたが主人の母との殺伐とした長年のオリを取り払ってくれるように修復のパイプ役となってくれました。主はこの子を用いて、主人が羨ましがるような笑顔を母から引き出してくださいました。

その六女は小学校生活が困難になり、四年生の春に転校した頃からピアノの先生である集会の姉妹に誘われ、日曜学校に導かれるようになり、私も恥ずかしいと思いながら戻らさせていただきました。その頃の私ども夫婦はガタガタでした。私の里の母との確執、姉弟との断絶、子どもの非行、教育問題、まだ他にもあったのかもしれません。

母を亡くした主人は、母への思いがますます強くなったように私には思えました。私のいらだちはどんなものにも向けられました。悔い改めもせずに集会に戻り、あらゆる人を裁き、自分ではないと言い放つ者でした。問題は深く、更に広がりました。

わが子よ。主の懲らしめをないがしろにするな。その叱責をいとうな。父がかわいがる子をしかるように、主は愛する者をしかる。　（箴言　3・11～12）

五年前の冬、私はもう離婚しかないと思い、その決断を主人に告げるべく話しだしたのですが、口から出たのはもう一度集会に誘う言葉でした。そして主人からも「自分もそう言おうと思っていた。しかし信ずるのではなく君と時

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（2コリント　5・17）

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。（ルカ　9・23）

ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。（ヨハネ　9・25）

次々と何者にも何事にも信頼しない私に恵みをあふれるほどに降り注いでくださいました。

あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。（ヨハネ　4・48）

間を共有したいから」という返事があり、集会に行くということに驚きつつ、翌日の礼拝に導かれました。

メッセンジャーは江藤兄弟でした。集会後、遠い駅向こうのレストランに入りました。五分もしないうちに、外に自転車を停められている江藤兄姉のお姿が目に飛び込んできました。「イエス様だ。何かある。初めて礼拝に出させていただいた主人にイエス様が働いてくださっている…」と確信しました。どうぞお交わりをお与えください！…初めて祈ったのだと思います。

面識のない江藤姉妹に相席をお願いし、お二人とも快く交わってくださり、その週からの祈り会に導かれ、「祈りは聞かれますから」というある姉妹の言葉に驚きました。祈りは聞かれるの？…と何度も心の中で反復いたしました。新しい自分と古い自分、初めて言われている意味がわかり、小躍りするように帰宅いたしました。

イエス様の不思議の御業で、主人との修復がはじまりました。主人が主人がと言ってきたことが私自身にあること、どうしようもない自我をまだ捨てられないこと、委ねられないこと、主に従えないことなどを思わされました。

あなたがたは新しく生まれなければならない。（ヨハネ　3・7）

昨年の一月末にまとまったお金が何回か必要でした。娘の出産祝や、就職で独立する娘の資金など前々からわかっていたことなのですが、どうもおかしいと思っていましたら、株の投資に失敗したらしく我が家にはもう動かせる現金がないらしいことがわかりました。生活費は頂いていましたが、それ以外は主人任せで私は無責任に言いたい放題、やりたい放題でした。こだわっていた習い事を直ぐにやめ、やりくりを初めていたしました。感謝して主からの食材を使わせていただき、以前には飽食でしたが、今はあるもので少しなのにみな満足し、翌日のお弁当の分まで残り、主人が美味しねえ、感謝だねえと言いながら頂いています。

そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。（使徒　2・46～47）

不思議とまとまったお金も用意され、やりくりしてこなかったことを主人に謝り、三月の車検だけが車屋さんに出せない状態になりました。どうやっても払えるお金がないのです。新しく就職する娘の専門学校の卒業でサプライズですと娘が言ってきました。「わずかだけれど、スカラシップで授業料が戻ることになったのでお金は間に合います」とのことでした。独立するために渡そうとしていたお金と車検代はほぼ同額でした。また日曜日の夜に数千円のお金を前に私は感謝のお祈りをいたしました。「イエス様、こ

れだけのお金があればこの一週間をまかなえそうです。来週はお給料が入ります。ありがとうございます」

翌日、中学生の娘の年度末の保護者会で、教育費の払い戻しがあり、その場でいただけることも今までなかったことですし、金額も担任が不思議がり、教師生活でこんなに返金は初めてですとおっしゃっていました。昨日十分ですとお祈りしたのに、どうしてなのでしょうとまたお祈りいたしました。翌日すっかり忘れていた三ヶ月に一度のサプリメントの支払いにぴったりの額でした。

ききんはあと五年続きますから、あなたも家族も、また、すべてあなたのものが、困ることのないように、私はあなたをそこで養いましょう。（創世記　45・11）

不思議なことにこのみことばを与えられる前に、主人からあと五年したら楽になるからねと言われているのです。先日お交わりに見えた姉妹と話していました主人が「お金がなくなったのは自分にとってよかった。僕は傲慢になっていたよ」と言っていました。

ところがこのとおり、あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです。（ヤコブ　4・16）

また、イエス様は、ほぼ同時に里の母との修復にも働いてくださいました。姉とは十一年、母とは九年間断絶していましたが、イエス様は母だけではなく同時に姉夫婦、弟に合わせてくださり、ふに落ちなかったことや、疑問が次々とほどけていきました。

実の母ではないという私の滑稽な妄想にあなたの自我がそう思わせたのですと、言われているようでした。外面的な環境や内面的な感情に溺れ、単純なことを複雑にしてしまう愚かな者です。

私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。主よ。今、あなたのしもべの咎を見のがしてください。私はほんとうに愚かなことをしました。（2サムエル　24・10）

怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。悪を行なう者は断ち切られる。しかし主を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。（詩篇　37・8〜9）

再会しましてから苫小牧に住んでいる母は何度か孫たちやひ孫の顔を見に上京しまして、その度に姉妹方にお交わりしていただいていましたが、昨年の三月に祈り会のお交わりに入れていただき、翌日御代田に導かれ、礼拝で聖餐に預かる恵みを頂きました。パン皿を何分も掲げ、決心して頂いたようでした。メッセンジャーは江藤兄弟でした。メッセージの最後に新しい方へと伝えてくださいました。「そのままでいいのです」。礼拝が終わりまして、江藤姉妹が母の手と私の手を重ねてくださり「もう姉妹よ」と言ってくださいました。温かな母の手でした。

神の和解を受け入れなさい。（2コリント　5・20）

今は毎朝八時に東京と苫小牧で家族のことを祈り合っています。この主からのお赦しの中での喜びからほどなく、私は主人を通して、本当に主の前に死ぬ体験を頂きました。

根っこの部分でこだわりを持っていたものが明るみに出て完全に降参いたしました。まだ主人にわかってもらおうと主に完全に明け渡していない自分がおり、自分の高ぶりが目の前に突きつけられました。この高ぶりは主人のみならずあらゆる方々の前にあったと思います。姉妹方の祈りでようやくここに立っているのに、イエス様が赦してくださっているからここにいるのに、立ちはだかっているのは、等身大

の自分でした。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

このみことばを祈り会で姉妹からいただき、直ちに主人の元へ返され、私のうちにあるイエス様が生きてくださり、修復への道となりました。主人は無意識と思いますが、毎日のように感謝だなと言うようになりました。食事にも、子どもたちにも、小さなことにも顔をほころばせて嬉しいなあとも言います。イエス様が言わせてくださっているのだと思います。

また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

（コロサイ　1・11～13）

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。

（伝道者　12・1）

子どもたちがイエス様を見上げないのは、私のいい加減さをつぶさに見ているからだと思います。主を恐れずに自分の思いを大事にしてきた至らなさを感じています。

わたしにとどまりなさい。

（ヨハネ　15・4）

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

（ヘブル　13・5）

物事が起きる前も、起きている時も、起こされた後も、全てにイエス様が関わってくださり、責任をとってくださり、生きて働いてくださり、最善であり、ご真実なお方であることを教えていただきました。

最後にみことばを読んで終わらせていただきます。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

（詩篇　103・1～5）

田原栄美子／一九五七年北海道札幌市生まれ。
北海道立苫小牧西高等学校卒業。
家族　主人・田原穣二　長女・久子　次女・北澤佳世子
三女・安村由子　四女・愛子　五女・園子　六女・直子
（次女、四女、五女は独立）

愛します主よ

橋本　俊郎



左から俊郎さん、妻の泰子さん、娘の愛実さん

私は一九五七年に広島県福山市で生まれました。家族は、父、母、そして姉二人、兄と私の四人兄弟の末っ子として育ちました。私が高校二年の春、父が事故で突然亡くなりました。五十九歳でした。あと二年もしないうちに定年になる父は、定年後は何をしようかと楽しみに、いろいろ考えていたようです。私は父の死に茫(ぼう)然とし、大学受験を控え将来をどうしたらいいのか、不安になりました。

大学は京都のミッション系の大学に進学しました。大学では、男声合唱団の先輩に勧誘されて入部しました。また合唱団の交流で、妻の泰子と知り合いました。彼女の家は、隣りが幼稚園と教会でした。日曜日のデートで何度か、礼拝にも付き合うことになりました。私には、教会で礼拝をした経験がありませんでしたので、聖書のみことばがとても新鮮に感じられました。

私は一九八〇年から東京のソフトウェア会社に就職しました。それから一九八三年五月八日に結婚し、市川市に小さなアパートを借りて住みました。妻が近くにある教会を探し、一緒に市川新田キリスト教会に通うようになりました。そこは小さな教会で、礼拝の参加者は二十～三十人でした。私たち二人が合唱をやっていたことで、牧師先生が聖歌隊を立ち上げたいということになりました。毎週、信者さん十人ほどで練習し、礼拝で賛美しました。この年、一九八三年のクリスマスの日に水の洗礼を受けました。特に、救いの確信があったわけではなく、聖霊のバプテスマのことはよく理解できていませんでした。

ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。（使徒　1・5）

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。（ローマ　6・4）

翌年の一九八四年十二月に長女を授かり、愛実と名前を付けました。一九八七年六月に長男寛喜を、一九九一年二月に次男恵太を授かりました。娘が一歳になるころ、習志野市の分譲マンションを購入し、移り住みました。教会も、市川の教会から津田沼の教会に通うようになりました。一方、私の方は教会から離れて、団地のテニスクラブ通いに夢中になっていました。

また、妻は一九八九年ころから市川キリスト集会に集うようになりました。かつて市川の教会におられた小川兄姉に誘っていただいたようです。私も旧軽井沢や御代田のキャンプには、何度か運転手として行きましたが、行った先ではもっぱら、公園で子どもと遊んで過ごしていました。

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。（1コリント　2・14）

主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と

訓戒をさげすむ。　（箴言　1・7）

私は二十年間、自分勝手な自由や楽しみを求め、主を避ける愚か者でした。私がキリスト集会に集うようになったきっかけは、妻が誘ってくれた、二〇〇三年十一月三日の府中の森でのメサイアコンサートを聴いたことです。20番の後半、ソプラノの曲を聴き、涙がとまりませんでした。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。　（マタイ　11・28〜29）

翌年の二〇〇四年四月、市川キリスト集会の方が結婚されるということで、お誘いをいただきました。まだ一度も会ったことのない方でしたが、参加してみたいと思いました。御代田の福音センターで行われた結婚式は、参加者が三百人、食事はケーキとコーヒー、その上、新郎新婦の語られる「証し」がメインディッシュでしたので、驚きと感動を覚えました。二〇〇四年五月の御代田キャンプで、長女の愛実が洗礼を受けるというので、家族全員で参加しました。またベック兄とお交わりする時もいただきました。その時はじめて、宗教と信仰の違いや、イエス様の十字架について理解できました。そして、私の心に聖霊が働き、イエス様を受け入れたように思います。翌日の礼拝で賛美をしていると、なぜか、涙が出て止まりませんでした。

私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。　（1コリント　2・12）

二〇〇四年夏、メサイアコンサートに参加したいと妻を誘い、初めてメサイア合宿に参加しました。コンサートへの参加の申込みをしましたが、その後が大変でした。メサイアは五十三曲から構成されていますが、合唱曲が二十曲あり、そのうち十八曲を演奏しました。そのうち、四曲は暗譜で楽譜を見ずに歌うとのことでした。練習用のテープを作り、通勤電車の往復で二回聞き、帰ってからも、妻と練習する毎日でした。四か月間の猛練習で、何とか全曲歌える状態でステージに上がることができました。初ステージは二〇〇四年十二月二十五日のすみだトリフォニーホールでした。二〇〇八年からは、長女の愛実も参加してくれました。メサイアコンサートは、二〇一〇年十二月十二日の東京文化会館での公演が最後となりました。イエス様をみんなで賛美し、53番アーメンコーラスが終わった時、感激のあまり涙を流しているメンバーが多勢いました。その中で「涙の多かったのが私かもしれない」と妻に話したら、妻は「私なんか、44番ハレルヤコーラスから涙が出てきた」といい、二人で笑いました。本当に喜びと感謝の時でした。

メサイアコンサートは主を賛美し、来場者にイエス様を紹介するのが目的ですが、私にとっては、キリスト集会に集う大きな動機づけになりました。また九州や大阪の方たちとも交わりの機会をいただき、本当に恵まれた時だったと思います。

二〇一二年はとても大変な年となりました。会社では分社化とリストラが行われ、私は子会社への異動となり、仲間が何人も辞めていきました。団地の管理組合では理事として自治部長を引き受け、地域のお祭りや迷惑駐車の問題、三・二地震の復旧工事の問題などに取り組みました。

そして母の死です。母は、二〇一二年八月に突然歩けなくなり、ひとりでは食事ができなくなり、入院しました。九月二日に九十歳の誕生日を迎え、九月二十日に亡くなりました。葬儀に関しては、母と同居しておりました兄がすべて段取りよく進めてくれました。ただし、仏式でしたので、私たち家族にとっては、針のむしろに座っている感じでした。心の中で「イエス様ごめんなさい。自分の母親をイエス様の救いに導くことができませんでした」と何度も何度も謝っていました。

そのような状況のなか、二〇一二年の年が明けてから、私の咳が止まらなくなりました。風邪かと思って二週間ほど薬を飲んでいましたが、治りませんでした。検査の結果、肺がんで脳やリ

ンパ節や骨にも転移しているため、ステージ4と診断されました。治療方法は、もう手術はできないので、放射線治療と抗がん剤での治療を行うか、緩和ケアになると説明を受けました。

四月から柏にある国立がん研究センターに入院し、脳への放射線治療を二週間、その後、シスプラチンとアリムタという抗がん剤の投与で、入退院を四回繰り返しました。八月からは通院で三週間に一回の抗がん剤治療を継続しています。私のがんの症状は、話したり歌ったりすると、咳が出るので息苦しくなります。抗がん剤の副作用としては、食欲不振があります。

最初にRI検査の画像を見た時、全身にがんの黒い影が飛び散っているので、ガーンと打ちのめされた感じでした。「これで俺の人生おしまいか」と思いました。しかし、この病気はイエス様から与えられたものであり、すべてイエス様が私のためにご計画されていること。自分の力ではこの病気を治すこともできないし、どうすることもできないので、イエス様にすべてお任せしようと思いました。「自分が弱いとき、砕かれたとき、内なるイエス様が強く働いてくださる」というみことばを実感し、すべて主にお委ねしようと思った時、心の平安とたくさんの恵みをいただくことができました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（2コリント　12・9）

また、ベック兄の飲んでおられるというイエス様からいただく三つの薬を、私もいただきました。「心配しない、思い煩わない、恐れない」。これで平安と心の元気をいただいています。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。（申命記　31・8）

私が入院中に、会社の人たちや友人が三～四人ずつ、三十人ほどお見舞いに来てくれました。来る前は、「どんな様子かな、何て声をかければいいのだろうか?」と、心配しながら来られました。しかし、来てみると、意外に元気そうにニコニコしているので、一時間くらいゆっくり話し、みなさん、ほっとした感じで、安心して帰られました。おみやげに、妻が書いてくれたお礼の手紙と、集会の小冊子「主は生きておられる」をお渡しすることができました。がんという病気を与えられて、好きな運動やコーラスはできなくなりましたが、家庭集会や各地で行われる喜びの集いに参加の機会を多く与えられ、みなさんとの交わりを通して、たくさんの喜びをいただくことができ、感謝しています。これからは、主によって生かされている人生ですから「愛します主よ」と賛美し続けたいと思います。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。（1テサロニケ　5・16～18）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。（1ヨハネ　4・19）

橋本俊郎／一九五七年生、広島県福山市出身
福山誠之館高校、同志社大学工学部卒
ソフトウェア会社勤務
妻・泰子　長女・愛実　長男・寛喜　次男・恵太

7 人の証し

Unser HERR lebt

事は、あわれんでくださる神によるのです

橋本 泰子



左から夫の俊郎さん、泰子さん、ベックさん、ミンヘンさん

1 救い主イエス様との出会い

私は、家の隣りが教会という、クリスチャンホームの長女として京都に生まれました。二十歳の時、牧師夫人の勧めで、滴礼で洗礼を受けましたが、霊の目は開かれておらず、主の前に自分が罪人であることは全くわかりませんでした。主にある平安・希望・喜びも持っていませんでした。ただ、「本物の信仰ってこんなものではない」、「神様のことをお伝えしたい」といった思いは、ずっと心の中にありました。この頃、主人・俊郎とそれぞれの大学で所属していた合唱団を通じて出会い、四年の交際を経て一九八三年五月に結婚し、千葉県市川市に住むようになりました。

主人は未信者でしたが、結婚後、近所の小さな教会に一緒に集うようになり、一九八三年のクリスマスに受洗へと導かれました。それは、ただ一方的な主のあわれみでした。けれど、この時の私は、主にご栄光を帰すことをせず、このことを自分の栄光としていました。主をおそれることを知らない、どこまでも高ぶる者でした。そして、生まれたばかりの主人の信仰をさばき始めました。

その後、牧師の交代や習志野市への引っ越しなど、様々なことが重なり、主人は教会から離れてしまいました。このことは、私にとって大きな重荷となりました。主は、一九八九年、市川キリスト集会へと導き出してくださいました。集会に集うようになってまもなく、主は私の信仰には喜びがないということに光を当ててくださり、「皆さんの持っておられる喜びを私にもください」と祈るよう導いてくださいました。

> 求めなさい。そうすれば与えられます。（マタイ　7・7）

この数日後、食事の支度をしていた時、急に自分の罪深さが一気に示され、「こんなどうしようもない罪人の私のために、イエス様が十字架にかかって、身代わりとなって死んでくださり、三日目によみがえり、こんな私も永遠のいのちの天国に入れていただける」という事実が、大きな喜びとなって心に湧き上がってきました。悔い改めと感謝の涙があふれ、止まりませんでした。救い主イエス様との個人的な出会いの時でした。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

2「信仰の破産」へと導かれて

けれど、この恵みをいただいた後も、私は自分自身を主に明け渡すことをせず、なおも自分の栄光を求める者でした。主は、そんな私を長女、長男、次男の三人の子育ての悩みを通し、また、姉妹方との交わりを通して「信仰の破産」へと導き、ありのままに正直に祈ることの大切さを教えてくださいました。何もできない者であるのに、主に頼らず、自分の力でやろうとしていつも失敗する、傲（ごう）慢と高ぶりの罪を悔い改めさせてくださり、次のようなみことばで、ぺちゃんこなった私を再び立ち上がらせてくださいました。

わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。今や、わたしはこの所でささげられる祈りに目を留め、耳を傾けよう。今、わたしは、とこしえまでもそこにわたしの名を置くためにこの宮を選んで聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある。

（2歴代誌　7・14～16）

わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。

（マタイ　9・13）

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ　43・4）

問題はいつも自分の外にあるとばかり思っていましたが、主は、閉ざされていた霊の目も開いて、一番の問題は自分自身の罪の性質にあることを教えてくださり、主人が教会から離れて以来、ずっと心の中に渦巻いていた「主人に対する不満やさばく思い」を少しずつ「感謝の思い」へと変えていってくださいました。自分でも不思議でした。こんな中、主は長女にも救いの御手をのべてくださり、「主人が主のみもとに立ち返ること」と「家族の救い」を祈り合う姉妹としてくださいました。共に祈り始めてしばらくした頃、集会のメサイア公演を主人と二人で聴きに行くことになりました。二〇〇三年十一月三日のことでした。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

このみことばが歌詞となっている20番が歌われている時、ふと横を見ると主人が涙ぐんでいました。主が主人の内に何かを起こしてくださっていることを思い、私も涙があふれてきました。そしてこのことを機に、主人は「二人でメサイア・コンサートに出よう」と言い出し、二〇〇四年の公演から夫婦で参加する恵みをいただきました。練習への参加を通して、主人は十九年ぶりに礼拝に集うようになりました。また、仕事が大変になる中、賛美することで心が守られているようでした。私たちが出会うきっかけとなった合唱をこんな形で用いてくださる、私の思いをはるかに越えた主のご計画に心から感謝しました。

けれど、このようにして何年か過ぎて行くうちに、私の心の中からは、共に礼拝し、賛美できることへの感謝と喜びがだんだんと薄れていき、それは、またもや「主人の信仰をさばく思い」へと変わっていきました。そしてある礼拝の後、その思いは主人を深く傷つけることばとなって私の口から出てきました。その日以来、主人は、集会にもメサイアの練習にも出なくなりました。

私はこのことを主の前に悔い改めました。しかし、それと同時に「まただ。この人はまた離れてしまった」という主人に対する失望感に打ちのめされ、しばらく、主人と口をきくのも辛い時期が続きました。けれど、自分のことしか考えられないみじめな者を主はあわれんでくださり、「主人の心も、私の心も、主ご自身が触れてくださらない限り決して変わらない。主人に期待するのではなく、主にだけ期待し、おゆだねして、その時を待とう。一番大切なのは、主と私の関係なのだから…」という思いへと導き、再び心に主の平安を与えてくださいました。そして、集会に導かれた当初にいただいていた家族の救いに関する約束のみことばを思い出させてくださいました。

この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう。万軍の主は仰せられる。わたしはまた、この所に平和を与える。――万軍の主の御告げ。――

（ハガイ　2・9）

わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成

し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。まことに、あなたは喜びをもって出て行き、安らかに導かれて行く。

（イザヤ　55・11〜12）

このお約束に信頼し、「この宮」を「この家族」と置き換えて、みことばそのものを祈りとして祈り続けるよう、心を整えていってくださいました。

こんなことがあって一年が過ぎた頃、主人は何もなかったかのように、また集会に、そしてメサイアの賛美へと戻ってきました。最後のメサイア公演となった二〇一〇年十二月十二日の東京文化会館のステージには、長女と三人で立つことを許され、参加された多くのご兄姉と共に一つとなって心からの感謝と賛美を主にお捧げすることができたことは本当にうれしく感謝でした。

3 主人に病が与えられて

二〇一二年三月、私たち家族に思いもかけないことが起こされました。若い頃からたばこを一切吸わない主人の肺に、癌が見つかったのです。しかも、すでに脳・リンパ節・骨にも転移が見られ、すべての検査が終了した時点で「肺腺癌のステージ4」と告げられました。このことを聞かされた時、私はぎゅーと胸が締め付けられるような息苦しい感覚を覚えました。そのような時に、次のみことばが心に浮かびました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

これらのみことばを通して、主人に与えられたこの病を「私たち家族にとっての主イエス様からの最善の恵みのご計画」として受け取ることができました。主人も「自分ではどうすることもできない。もうおゆだねするしかない」と主の前に全面降伏し、心に真の平安をいただきました。

生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

（ローマ　14・8）

私たちの国籍は天にあります。

（ピリピ　3・20）

永遠のいのちと天国を真の希望の場所としていただき、「死は終わりではない」と言うことのできる恵みに心から感謝いたします。主は、主人の病が明らかになる前に、私の心に大きな備えをしてくださっていました。それは、吉祥寺に向かう電車の中で祈っていた時のことでした。ふと心の中に、「おまえの夫は俊郎だ。わたしがおまえにとって最善として与えた夫に対して『もっとこうあってほしい』とつぶやくおまえは、わたしに文句を言い、わたしに罪を犯し続けているのだ」という主からの声が思いとなって湧（わ）き上がってきました。

「主よ、ごめんなさい。あなたのおっしゃる通りです。どうぞ赦してください」とあふれる涙をハンカチで押さえながら悔い改めました。長い間、心の奥底にへばりつくようにあった重荷が、この時スーと消えていくような気がしました。とてもすがすがしく晴れやかな気持ちでした。そして「私にとって主人は本当に大切な人なんだ」という思いが主人への感謝となって、泉のように湧いてきました。

なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。（マタイ　7・3～5）

この四か月後に主人の病がわかりました。厳しい闘病生活を前にして「必要不可欠な心の備え」を私にも与えてくださったのでした。「主の山の上には備えがある」（創世記　22・14）のみことばをかみしめました。主人は、放射線治療と抗がん剤の化学療法を受けることになりました。薬の副作用による食欲不振や咳き込みの苦しい状況の中にあっても、「心配しない。思い煩わない。恐れない」のイエス様からいただく薬を飲んで、今日までずっと主にある平安をいただいています。

また、私たち家族も、幼な子のように素直に主に信頼し、穏やかに過ごしている主人の内に、生きて働いてくださる主イエス様を見せていただき、心が平安に守られています。すべては、ただ、ただ、主のあわれみです。心から主の御名を賛美し、感謝いたします。また、こんなに弱くみじめな私たち家族のために、祈り支えてくださっている多くのご兄姉のお祈りに心から感謝いたします。私たちは、主にあって本当に幸せ者です。

事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。（ローマ　9・16）

これから起こるすべてのことも、主の最善として平安の内に御手から受け取り、感謝と賛美をもってすべておゆだねし、主にお従いしていきたいと、心から願い祈っています。

自分自身の祈りとして毎朝祈っている「私の意思をみこころのままに」と題する「パスカルの祈り」をもって、終わらせていただきます。

主よ　今から、あなたのご用のために、あなたとともに、またあなたにおいて、役立てる以外には
私が健康や長寿（や、自分自身の思いの成ること）を
いたずらに願うことがありませんように。
あなたお一人が、私にとって何が最善であるかをご存じです。
ですから、あなたがご覧になって、
もっともよいと思われることをなさってください。
私の意思をあなたのご意思に従わせてください。
そして、へりくだった、まったき従順の思いをもって、
きよらかな信仰を保ちつづけ、
あなたの永遠の摂理によるご命令を
受け取ることができますように。
そして、またあなたから与えられるすべてのものを
賛美することができますように。

注：（　）内は私が付け加えて祈っているものです。

橋本泰子／一九五八年生、京都市出身
嵯峨野高校、平安女学院短期大学保育科卒
夫・俊郎　長女・愛実　長男・寛喜　次男・恵太

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

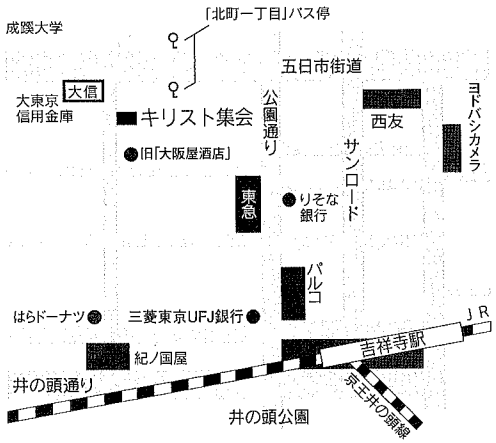
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

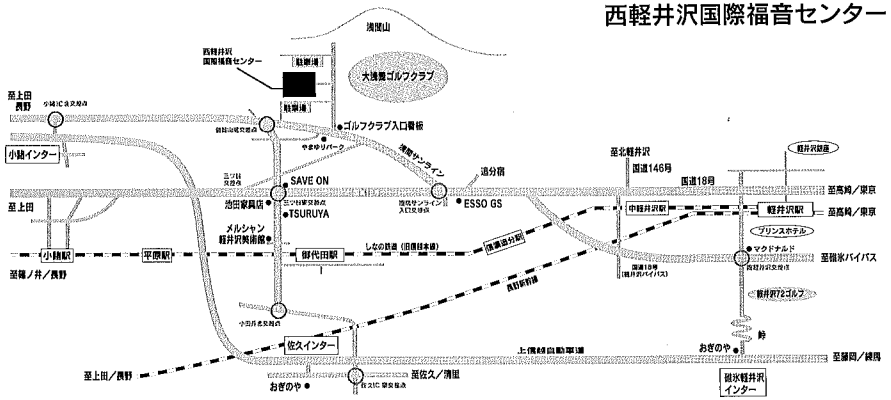
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■ しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

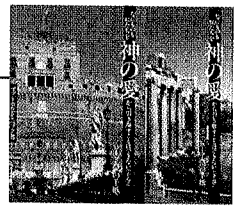


ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

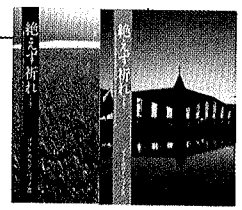
なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ (上・下巻)



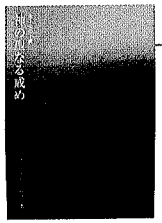
ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

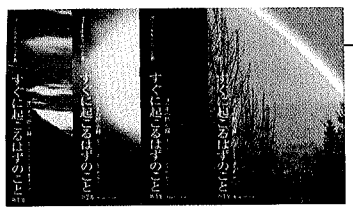
集会の出版物



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ －私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を100円で配付しています。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第28号

定価100円（本体95円）2013年4月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
ドイツ語翻訳	久田博　久田倫子　久田健一郎
デザインスタッフ	石黒都彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

